

●国際連合大学 2016-2017 年国際教育交流事業●
中国教職員招へいプログラム
実施報告書

第1班 2016年11月7日(月)－11月13日(日)

第2班 2016年11月28日(月)－12月4日(日)

国際連合大学 (UNU)
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

●国際連合大学 2016-2017 年国際教育交流事業●
中国教職員招へいプログラム
実施報告書

第1班 2016年11月7日(月)–11月13日(日)

第2班 2016年11月28日(月)–12月4日(日)

国際連合大学 (UNU)
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

はじめに

国際連合大学 (United Nations University) は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取り組みに、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、2002年に主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を開始しました。本事業のもと、同年、日中国交正常化30周年を記念した「中国教職員招へいプログラム」が開始され、同大学からの委託を受けて公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施を担当し、これまでに1600名以上の中国の教職員を日本に招へいしてきました。

今回の国際連合大学国際教育交流事業・中国教職員招へいプログラムは、第1班を2016年11月7日（月）から13日（日）、第2班を11月28日（月）から12月4日（日）のそれぞれ7日間にわたり、中国の小・中・高等学校の教職員等40名を我が国に招へいしました。このプログラムは学校およびその他の教育・文化施設を訪問・見学することにより、日本の教育制度およびその現状についての理解を深め、ひいては、両国の相互理解と友好を促進することを目的としています。

実施にあたりましては、日本の文部科学省と外務省、中国政府教育部、高知県教育委員会、奈良市教育委員会、訪問先の学校、その他教育・文化機関等、多数の方々の多大なるご支援とご協力をいただきました。ここにあらためて関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2017年2月
国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

目 次

第 I 章 実施内容

1.	第 1 班プログラム	5
1-1.	全体プログラム（東京）	5
1-2.	地域受入れプログラム（高知県）	7
1-3.	全体プログラム（東京）	11
2.	第 2 班プログラム	11
2-1.	全体プログラム（東京）	11
2-2.	地域受入れプログラム（奈良市）	13
2-3.	全体プログラム（京都）	18

第 II 章 コメントと提案

1.	中国教職員	21
2.	受入れ教育委員会	35
3.	受入れ校	36

付 錄

1.	実施要項	42
2.	プログラム日程	44
3.	参加者リスト	48
4.	関係機関リスト	50
5.	文部科学省講義資料	52
6.	過去のプログラム実績	55

第I章

実施内容

1. 第1班プログラム
2. 第2班プログラム

1. 第1班

1-1. 全体プログラム（東京）

（1）来日、オリエンテーション

「中国教職員招へいプログラム」第1班の参加者20名が、2016年11月7日（月）に来日した。第1班は、安徽省、湖北省、甘粛省、中国教育部からの参加者で構成されており、安徽省教育庁外務部長の丁育紅（DING Yuhong）氏が団長であった。

羽田空港から大崎に移動した訪問団は、滞在先のニューオータニイン東京で、オリエンテーションを受け、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）の担当スタッフの紹介や、プログラム日程説明、滞在ガイダンスなどが行われた。

（2）開会式・歓迎交流会

同日夕方、ニューオータニイン東京の3階「おおとり東」において開会式・歓迎交流会が開催された。国際連合大学大学院事務局長の古田知美氏、文部科学省国際統括官の森本浩一氏、中華人民共和国駐日本国大使館教育部一等書記官の譚永東（TAN Yongdong）氏ほか、ACCUからは足立直樹理事、三木繁光理事が出席した。

はじめに各関係機関からあいさつがあり、国際連合大学の古田氏からは、限られた期間ではあるが、日本の学校教育への理解が進み、これを機会に日中の学校間での継続的な交流につながることを期待する。訪問校の中には、今年6月に「中国政府日本教職員招へいプログラム」で訪中した教職員もあり、中国で受けたおもてなしをお返ししたいと、皆様の訪問を心待ちにしている、とのあいさつがあった。続いて、文部科学省の森本氏は、今回の滞在中に得られた体験をそれぞれの教育活動に生かしていくとともに、等身大の日本の姿を中国の子ども達に伝えてほしい、とあいさつした。中華人民共和国駐日本国大使館教育部の譚永東氏からは、この機会を大切にし、日本の教育界の方々との交流を深め、特色と長所を学んでほしい、とあいさつを述べた。続いて、中国教職員訪問団を代表し、団長の丁氏から、来日できて嬉しい、

今回の訪問は、今後さらに協力関係を発展させるためきっかけとしたい、の返礼のあいさつがあった。

記念品交換の場では、文部科学省の森本氏から中国教育部の童蘇陽（TONG Suyang）氏へ記念品が贈られ、童氏からも記念品が贈呈された。続いて、ACCUの足立理事から団長の丁氏に記念品贈呈が行われ、丁氏からも記念品が贈られた。

続いて、ACCUの三木理事の乾杯の音頭で、食事と歓談がはじまり、訪問団員たちは和やかに懇談に興じた。途中、6月に訪中した日本教職員と訪問団の音楽教員が茉莉花を披露する場面も見られた。



歓迎交流会の様子（東京）

（3）文部科学省表敬訪問

プログラム第2日の11月8日（火）午前、一行は文部科学省を表敬訪問した。

はじめに、大臣官房国際課国際戦略企画室長の小林洋介氏があいさつし、是非とも今回の訪問を通して日中の教育交流の架け橋となっていただくことを期待している、と述べた。続いて、訪問団を代表して、湖北省教育庁対外協力交流部調査研究員の盧進元（LU Jinyuan）氏が、日中両国の教育交流と協力をさらに推進し、両国民の理解と友情を深めていきたい、と返礼のあいさつを述べた。

次に、初等中等教育局初等中等教育企画課国際企画調整室専門職の市川清治氏より、「日本の初等中等教育の概要」と題して講義があった。講義では、基本的な教育制度に加え、現在の教育施策についても言及され、訪問団は、日本の初等中等教育について、基本的なことを学んだ。質疑応答の時間には、学習指導要領や生徒の評価

システム、教育基本法に関する質問が挙がった。最後に訪問団より感謝を込めて、市川氏に「西遊記」の本が贈られた。

講義内容は以下の通りである。

I. 日本の初等中等教育制度

- ・学校体系、学校数・生徒数・教員数、在籍者数・就園率および就学率の経年変化
- ・義務教育制度の概要
- ・教員養成・免許制度の概要
- ・教育行政制度の概要
- ・学習指導要領

II. 日本の教育政策の一部の紹介「高大接続について」

- ・「高大接続改革」とは
- ・「高大接続改革」の必要性
- ・「高大接続改革」の全体像イメージ



正面玄関前で記念撮影（文部科学省）

(4) 麗澤中学校・高等学校訪問

同日の午後、一行は千葉県柏市にある麗澤中学校・高等学校を訪問した。同校は、1935年に麗澤大学の併設校として設置された男女共学の中学校および高等学校である。創立以来「知徳一体」を教育理念とし、道徳教育を根幹に据えた教育を行っている。

到着後、訪問団は校内のレストランで昼食をとり、木々に囲まれたキャンパスを散策し、リラックスした様子で校内の様子を見学した。

学校訪問が始まると、初めに校長の竹政幸雄氏のあいさつがあった。あいさつは、ホワイトボードと英語を用い、学園には広大なキャンパスがあり、その中には、幼稚

園・中学校および高等学校・大学・高齢者住宅・公益財団法人モラロジー研究所等があることが紹介された。続いて、訪問団を代表して、湖北省仙桃中学副校長の肖敦洪（XIAO Dunhong）氏が訪問のお礼と、この機会を生かし、自分の目で見て、自分の耳で聞いて、しっかりとと考え、日本の先進的な教育事例を中国に持ち帰りたいと述べ、団長の丁氏が記念品を贈呈した。

次に、教頭の松本卓三氏より同校の学校概要説明があり、建学の理念、道徳教育の概要、部活動、進学実績などを紹介された。

続いて行われた教職員交流は、訪問団からの質問に答える形式で進められた。訪問団からは、同校の道徳教育について、教員への指導や展開について、教材についての質問が挙がり、訪問団の道徳教育についての関心の高さがうかがえた。

次に、施設および部活動を見学した。当日は、学校行事の都合で授業は行われていなかったが、訪問団が学習スペースで勉強している生徒と交流する場面も見られた。教室や図書館などの施設を見学した後、部活動を見学した。中国では、部活動を行う学校は珍しく、バレーボール部が練習している体育館では、熱心に見学する様子が見られた。続いて吹奏楽部の生徒5名による「LUNA」の演奏を聴いた。生徒が移動しながら複数の楽器を担当しており、とても5名で演奏しているとは思えない迫力のある演奏に、訪問団は圧倒された。帰りのバスの中では、吹奏楽部の演奏に心が震えたという声も聞かれた。



生徒と交流する訪問団（麗澤中学校・高等学校）

1-2. 地域受入れプログラム 第1班：高知県

プログラム第3日の11月9日（水）から第5日の11月11日（金）の3日間、第1班20名は高知県教育委員会の受入れにより、高知県を訪問した。

同県は、黒潮打ち寄せる変化に富んだ海岸線を有し、森林率が84%と日本一を誇り、林業が盛んである。今回訪問した四万十市には、「日本最後の清流」といわれる四万十川が流れ、美しく豊かな自然に囲まれている。

（1）高知城見学

プログラム第3日の11月9日（水）午後、東京から同県入りした一行は、高知城を見学した。高知城は、日本で唯一本丸の建築群が全て現存する、江戸時代の姿を今に伝える城郭である。

息を切らしながら石段を上り、本丸に到着した訪問団は、訪問の記念に全員で記念写真を撮った。その後、思い思いに展示物を見学したり、高知市内を一望できる天守閣に上ったりして、高知の歴史に触れた。



天守閣前で記念撮影（高知城）

（2）高知県教育委員会表敬訪問

高知城を後にした一行は、同日午後3時より、高知県庁西庁舎にて高知県教育委員会を表敬訪問した。

はじめに、高知県の教育長である田村壮児氏より、歓迎のあいさつがあり、高知県は、1994年に安徽省と友好提携を結んだこと、「知・徳・体」のバランスのとれ

た児童生徒の育成に注力していることなどが紹介された。続いて、訪問団を代表して、安徽省淮南洞山中学副校长の王洪軍（WANG Hongjun）氏があいさつし、今回は皆さんと友達になり、友情を深めたいと思って来日した、と述べた。続いて記念品交換があり、高知県からは訪問団全員に土佐茶、扇子、高知家のピンバッジなどが、訪問団からは王氏の学校の生徒が書いた絵が贈られた。

次に、高知県の本プログラム担当である、教育政策課市町村・学校組織支援担当主幹管理主事の今西一成氏より、高知県の概要説明があり、人口・県民性・歴史・産業・観光名所・祭り・食文化などが紹介された。

続いて、教育政策課長の渡邊浩人氏より、高知県の教育概要について説明があった。渡邊氏の説明は、「高知県の教育」と「教育等の振興に関する施策の大綱」の2点を用い、教育委員会の組織や予算の他、学力や体力の状況や5つの取組の方向性などが説明された。5つの取組の方向性は下記の通りである。

- ・チーム学校の構築
- ・厳しい環境にある子どもたちへの支援
- ・地域との連携・協働
- ・就学前教育の充実
- ・生涯学び続ける環境づくり

次に、高等学校課長の高岸憲二氏より、高知県の高等学校概要についての説明があり、学校数や生徒数、入試、進路状況についての説明があった。

最後に、特別支援教育課長の橋本典子氏より、特別支援学校概要についての説明があり、学校数や児童生徒数、高知県内の特別支援学校分布図などが紹介された。

概要説明の後、質疑応答の時間が設けられ、訪問団からは下記のような質問が挙がった。

- ・ここ2年間の小学校および中学校の入学率
- ・50歳以上の教員が多いようだが、若年教員への研修は行っているか。
- ・高校入試は入試の成績のみで合否が決まるのか。

- ・特別支援学校への入学者は自治体が決めるのか。
- ・日本は少子化社会だが、教員数も減っているのか。
- ・児童生徒の暴力について、具体的にはどのように対策しているのか。
- ・優秀な先生が都市部に集まってしまうことはないか。
- ・専門高校はいつからあるのか。時代の流れとともに最近できたのか。

高知県教育委員会表敬訪問終了後、訪問団はバスで四万十市へ向かった。



歓迎のあいさつをする田村教育長（高知県庁）

（3）沈下橋見学・四万十川遊覧

前夜遅くに四万十市入りした一行は、プログラム第4日の11月10日（木）午前、四万十川に向かった。四万十川は、高知県西部を流れる四国最長の川であり、「日本最後の清流」と言われ、長良川・柿田川とともに「日本三大清流」の1つとしても知られている。

四万十川には、47の沈下橋がかかっている。沈下橋とは、増水時に川に沈んでしまうように設計された、欄干のない橋のことである。緑の山々に囲まれた青い四万十川、そしてそこにつかる沈下橋という風景は、もっとも四万十川らしい風景とも言われる。

今回見学した佐田の沈下橋は、四万十川最下流にかかる最長の沈下橋である。訪問団は沈下橋を横から観察したり、実際に橋の上を歩いてみたり、四万十川ならではの光景を楽しんだ。

沈下橋を後にした一行は、屋形船に乗り、四万十川を遊覧した。沈下橋を渡って

登校する子どもたちは川が増水すると登校できないことを知り、四万十川が流域に暮らす住民と密接な関わりがあることを感じた。



屋形船で遊覧を楽しむ訪問団（四万十川）

（4）高知県立中村特別支援学校訪問

同日午後、一行は高知県立中村特別支援学校を訪問した。同校は、昭和47年に高知県西部の唯一知的障害養護学校として開校し、平成23年に、肢体不自由部門を併置し、特別支援学校となった。現在は、キャリア教育の視点に基づき、小中高の12年間の系統的・継続的な指導を行うことで、卒業後も職業人・社会人として生きていくための力を育てている。

到着後、校長の利岡徳重氏より、歓迎のあいさつが述べられ、両国の特別支援教育の発展を祈念した。また、訪問団を代表して、湖北省宜都市陽守敬小学校長の李紅軍（LI Hongjun）氏が温かい歓迎に対するお礼を述べ、記念品を贈呈した。続いて、学校概要説明では、知的障害と肢体不自由の児童生徒を分けて教育課程を設けていることや、登校が難しい児童生徒への訪問学級を行っていることなどが紹介された。

続いて、3班（小学部・中学部・高等部）に別れて授業見学を行った。小学部のリズム体操の授業では、教職員と児童が一対一で教えているところを見学し、一行は児童生徒への教育の手厚さに驚いた。中学部では、音楽の授業でクラスメイトの誕生日のお祝いの歌を歌っている様子などを見学した。高等部では、木工の授業を見学し、燻製用の木箱や、子ども用イスなどの作品の完成度の高さに、一行は高い関心を持っていた。その後、寄宿舎を見学し、児童生

徒の日常生活の様子を知ることができた。

授業見学を終え、教職員交流の時間が設けられた。訪問団は、愛情にあふれた教育に感動し、命の学校であると賞賛した。また、児童生徒の自立についてや、政府からの補助金や教職員の待遇など、様々な質問が飛び交い、日本の特別支援教育についての理解が深まった。最後に、訪問団一人ひとりに、児童生徒の手作りのペン立てが贈呈された。



高等部の木工の授業を見学する団員ら
(高知県立中村特別支援学校)

(5) 高知県立幡多農業高等学校訪問

プログラム第5日の11月11日(金)午前、一行は高知県立幡多農業高等学校を訪問した。同校は農林業を主軸産業とする中村地域において、地域で活躍できる人材育成するため、1941年に創立され、1969年より、現在の校名となった。「農業を学ぶ教育」と「農業で学ぶ教育」を実践し、地域に根差し、リーダーシップが取れる人材の育成に取り組んでいる。

到着後、訪問団は生徒会の歓迎を受け、大会議室に案内された。生徒の司会によって学校訪問が始まると、はじめに校長の宮川雅一氏のあいさつがあった。同校が高知県に2校しかない農業高校であること、地域に根差した学校として、地域からの期待が大きいこと、部活にも熱心に取り組んでおり、全国大会への出場者が多いことなどが述べられた。続いて、制服や実習服のファッションショーがあった。音楽に乗って生徒が登場すると、会場は笑い声にどっと沸いた。制服に興味をもつ参加者も多く、夏服・冬服があること、各科毎に実習服が異なることが説明されると、とても興味深

そうに聞いていた。

続いて、学校紹介があった。現在同校は、園芸システム科、アグリサイエンス科、グリーン環境科、生活コーディネート科の4つの科があること、「農業」と「環境」は1年次では必修であり、2年次からはコース毎に分かれて専門科目を学ぶことなどが説明された。地域の方がこぞって訪れる「はたのう祭」が訪問の翌週に行われる事が説明されると、1週間後にもう一度来たい、という声も聞かれた。

続いて生徒会の案内による授業見学があった。図書館やPC室、教室を見学し、教室の後方に個人用の棚があることに関心をもつ参加者もいた。校舎外の見学では、同校名物「アグリぽっぽ」(トラクターが引っ張る乗り物)に乗り、広い校内を移動した。豚や牛、馬がいる厩舎の見学では、絞った牛乳の行先、厩舎の清掃は生徒がするのかという質問や、園芸専門棟では、肥料や栽培方法についての質問が挙がった。

大会議室に戻ると、次に質疑応答の時間があった。同校の教職員に対しては、学校運営で最も困難だったことは何か、教職員の異動について、座学と実習の割合などについて質問が挙がった。生徒に対しては、卒業後の進路や将来就きたい職業、なぜ同校に進学したのか、などについて質問が挙がった。

最後に訪問団を代表して、安徽省黄山市田家炳実験中学副校长の許莉(XU Li)氏が感謝の意を述べ、記念品を交換した。



アグリぽっぽに乗って厩舎に向かう訪問団
(高知県立幡多農業高等学校)

(6) 高知県立中村中学校・高等学校訪問

同日午後、訪問団は最後の訪問校となる、高知県立中村中学校・高等学校を訪問した。同校は、高知県西部の教育の中心的役割を果たす高等学校として、1900年に創立した。2002年4月に高知県立中村中学校を併設し、豊かな心と知性を身に付け、高い志を持って未来を切り拓く人材の育成を目指している。

学校に到着すると、校舎に掲げられた訪問団歓迎の懸垂幕を目にし、同校の歓迎の気持ちを感じた。大会議室に入ると、はじめに教頭の田邊法人氏より歓迎のあいさつがあった。修学旅行の引率のため、校長が不在であること、自然豊かでのんびりとした気質の人々が多い地域性で、素直で情に厚い生徒が多いことなどが紹介された。次に、訪問団を代表して、甘肃省敦煌市七里町中学校長の金峰（JIN Feng）氏が、今回の訪問を通して、相互理解と友情を深め、今後も交流していくことを述べ、金氏の生徒が書いた書道の作品とケンシヨウという楽器の模型が同校に贈られた。

続いて、生徒によって漢詩の詩吟が披露された。李白の「春夜洛城聞笛」という中国では誰もが知る故郷を懐かしむ詩であり、訪問団は、その美しい歌声と節まわしに聞き惚れ、故郷への思いをはせた。

その後、高校1年から3年の教室を見学し、普段の授業の様子を見学した。中学1年のクラスでは、将来就きたい職業等の発表をする「ドリームマップ」の授業が行われており、参加者は、同校の子どもたちが将来どんな職業に就きたいと思っているか、関心を寄せていた。

大会議室に戻り、質疑応答が行われた。訪問団からは、下記のような質問が挙がった。

- ・中学1年生のクラスに、3人の教員がいた。それぞれどのような役割なのか。
- ・部活動の頻度や時間帯、指導者は誰か
- ・部活動の後は帰宅が遅くなると思うが、帰宅方法は。
- ・ネット中毒の生徒はいるか。
- ・週末の補講はどうのように運営しているのか。予算はどこからくるのか。
- ・生徒の昼食は給食か。それとも持参す

るのか。

最後に、全員で記念写真を撮り、プログラム最後の学校訪問を終えた。



授業見学の様子(高知県立中村中学校・高等学校)

(7) 高知県歓送迎会

学校訪問を終えた一行は、四万十市から高知市に移動した。同日夜、高知市内にある高知共済会館で、高知県教育委員会主催の歓送迎会が催された。出席者は、高知県教育長の田村壮児氏をはじめとする教育委員会の職員やボランティア通訳および訪問団であった。

高知県側の出席者に拍手で迎えられた参加者が席に着くと、教育政策課長補佐の隅田昌宏氏の司会により開式となった。

はじめに、教育長の田村氏が歓迎のあいさつをし、3日間の滞在はいかがだったか、高知県を訪れた人は「高知家」という家族の一員である、3日間の疲れを癒し、楽しんでほしいと述べた。次に、訪問団を代表して、湖北省利川市第一中学副校長の向一丁（XIANG Yiding）氏が、短い間に日本の教育界の多くの方と友達になり、実り多い成果を収めた。日本の文化と先進的な教育理念を一刻も早く中国に持ち帰り、中国の人々に伝えたい、と返礼のあいさつを述べた。

続いて、教育次長の藤中雄輔氏による乾杯の音頭で歓談が始まった。歓談中には、高知県のPR動画が上映され、ボランティア通訳の協力によって、日中間の会話も盛り上りを見せた。途中、高知県庁よさこい正調クラブによって、よさこい鳴子踊りが披露され、鳴子の軽快な音に訪問団は手拍子で応えた。続いて、訪問団にも法被と鳴

子が渡され、同県の方に教わりながら、訪問団も一緒によさこいを踊った。大盛り上がりの中、最後に訪問団に同県滞在中の感想が訊かれた。訪問団は中国の方らしく、2 文字の漢字で感想を現し、「豊富」「収穫」「感動」「感謝」「自覚」「精神」「美しい」「清潔」「愛に満ちた国」「秩序正しい」などの言葉を挙げ、同県の方々に感謝を伝えた。

最後に、教育次長の永野隆史氏が、バッグに隙間があるならば私を連れて帰つてほしいほど別れが寂しいが、これから力を合せて幸せな世界を築いていきましょう、とあいさつを述べた。訪問団は、この歓送迎会をもって、高知県訪問を締め括つた。



よさこいを踊る訪問団（高知県歓送迎会）

1-3. 全体プログラム（東京）

（1）東京近郊自由研修

プログラム第 6 日の 11 月 12 日（土）、午前中に高知県から東京に戻った訪問団は、昼食後東京近郊で自由研修の時間となつた。

参加者は、複数人のグループに分かれ、銀座や新宿など、思いおもいの場所で滞在最終日を楽しんだ。

2. 第 2 班

2-1. 全体プログラム（東京）

（1）来日、オリエンテーション

第 1 班に引き続き、「中国教職員招へいプログラム」の第 2 班参加者 20 名が 2016 年 11 月 28 日（月）に来日した。第 2 班は、山西省、北京市、甘肃省、中国教育部からの参加者で構成されており、山西省教育厅副厅長の王雲（WANG Yun）氏が団長であった。

同日、滞在先のニューオータニイン東京の 3 階「おおとり西」にて、オリエンテーションが行われた。公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）人物交流部長の進藤由美の歓迎のあいさつの後、ACCU 担当スタッフが紹介され、ACCU 職員よりプログラム日程説明や滞在ガイダンスなどが行われた。

（2）開会式・歓迎交流会

同日夕方、ニューオータニイン東京の 3 階「おおとり東」において歓迎交流会が開催された。

国際連合大学大学院事務局長の古田知美氏、文部科学省大臣官房国際課国際戦略企画室長の小林洋介氏、中華人民共和国駐日本国大使館公使参事官の胡志平（HU Zhiping）氏ほか、ACCU からは山根隆理事と高坂節三理事が出席した。

国際連合大学の古田氏からは、この事業を通して、次世代を担う人材の育成に向けて日中両国の教育の質を高め、相互理解と友好の促進に貢献していただきたい、とのあいさつがあった。続いて、文部科学省の小林洋介氏より、教育分野での交流は、世代を超えて人ととの相互理解を深めるものであり、大変大きな意義を持っている、日中関係を前に進めることにつながると確信している、とあいさつした。胡氏からは、交流を通じ、相互理解と友情を深め、長期にわたる学校間の交流関係を築くことを願っている、とのあいさつがあった。

各代表あいさつの後、中国教職員訪問団を代表し、今回の訪問団団長である、王氏から、歓迎の謝辞と共に、この事業は、

日中両国の教職員に交流の機会を提供しており、相互理解と友情を増進する場となることを期待している、と返礼のあいさつがあった。

記念品交換の場では、文部科学省の小林室長から中国教育部の張月盈氏へ記念品が贈られ、張氏からも記念品が贈呈された。続いて、ACCU の山根理事から訪問団団長の王氏に記念品贈呈が行われ、王氏からも記念品が贈られた。

続いて、ACCU の高坂理事の乾杯の音頭で、食事と歓談がはじまり、訪問団員たちは和やかに懇談に興じていた。



ともに「赤とんぼ」を歌う日本教職員と中国教職員（歓迎交流会）

(3) 文部科学省表敬訪問・講義

プログラム第2日の11月29日（火）午前、一行は文部科学省を表敬訪問した。

到着後はじめに、大臣官房国際課国際戦略企画室長の小林洋介氏が、本プログラムは、充実した密度の濃い内容となっている、これから行う日本の初等中等教育についての講義を通して、日本の教育制度をご理解いただき、貴国（中国）の教育に役立ててほしい、とあいさつを述べた。続いて、訪問団団長の王氏が、これまでにも多くの教職員がこのプログラムを通して日中両国の相互理解と友好感情を深めた。今回の訪問もそうなることを信じている、と述べた。次に、初等中等教育局初等中等教育企画課課長補佐の北野允氏により、「日本の初等中等教育」と題して講義があった。講義では、基本的な教育制度や、教育施策についても言及され、訪問団は、日本の初等中等教育について、基本的なことを学んだ。質疑応答の時間には、私立校教員の人事権や待遇

について、教員研修の実施機関について、高校の進学率、教員の等級についての質問が挙がった。

講義内容の詳細は、1班と同様であった。



正面玄関で記念撮影（文部科学省）

(4) 神田女学園中学校・高等学校訪問

同日の午後、一行は神田女学園中学校・高等学校に訪問した。同校は、創立126年の伝統を誇る女子校で、生徒が主体的学び、行動する新しい教育を展開している。特に、外国語教育に力を入れ、英語、中国語、韓国語などを徹底的に学び、広い視野と国際性を身に着けた女子生徒を育てている。

学校到着後、校長の高橋順子氏より、歓迎の言葉が述べられた後、訪問団を代表して、山西大学付属子弟小学校長の馬偉蘭（MA Weilan）氏が本日の同校の訪問に多いに期待していることを挨拶で述べ、記念品を贈呈した。続いて、同校の中国語教諭の通訳を介し、高橋校長より学校概要説明があった。同校は、私立の中高一貫校としての特質を生かし、グローバルクラス、アドバンスドクラス、フューチャークラスを配置していることや、外国語教育について、2017年より一人一台のPCを導入し、授業のIT化を目指していることが紹介された。

次に教室に移動し、DE（Developmental Education）と呼ばれるタブレットを使用した自主学習の授業とHR（ホームルーム）を見学した。グローバルクラスの中学1年生のHRは、ネイティブの先生によって英語で行われ、外国語教育の高さが伺えた。また、掃除の様子を見学した際、同校

の教職員が自ら掃除をする様子を目にして、訪問団は非常に関心した。その後、2 グループに分かれ、英語、数学、化学、国語、数学などさまざまな授業を参観した。

続いて、同校の教職員との意見交換が行われた。「海外留学制度について」「生徒の安全や健康」についての質問があがった。特に、学校の登校時・下校時に、玄関でカードをかざすと、保護者に情報が送られるというシステムに訪問団は感嘆していた。

最後に、同校の中国語を選択する生徒たちとの交流の場が設けられた。訪問団は、日本の生徒の日常生活や、制服についてなど、熱心に質問をしていた。また、同校の生徒の中には、中国留学を控えている生徒もあり、留学への期待が高まったようだ。



楽しく生徒と中国語で交流する団員ら
(神田女学園中学校・高等学校)

2-2. 地域受入れプログラム 第 2 班：奈良県奈良市

プログラム第 3 日の 11 月 30 日（水）から第 5 日の 12 月 2 日（金）までの 3 日間、奈良市教育委員会の受入れにより、訪問団は奈良市を訪問した。

奈良市は、710 年に唐の長安をモデルとした平城京がおかれた古都であり、現在多くの文化財や伝統文化が残されている。

（1）奈良市教育委員会表敬訪問

プログラム第 3 日の 11 月 30 日（水）午後、一行は奈良市教育委員会を表敬訪問した。奈良市役所の 1 階ロビーには、実際の 1000 分の 1 のスケールで造られた、「平城宮跡復元模型」が展示され、東西 8.3m × 南北 6.4m の巨大なジオラマに見る参加者もいた。

北棟 6 階の会議室で行われた表敬訪問では、はじめに学校教育部学校教育課長の東畠年昭氏が歓迎のあいさつをし、奈良と中国は 1300 年以上前から交流があり、奈良にある唐招提寺は唐から来日した鑑真和尚によって 759 年に開かれた、今回の訪問でも奈良市の子どもたちと身近に接して中国の文化を紹介していただき、子どもたちの国際理解を深めてほしい、と述べた。続いて、訪問団を代表して、山西省太原市第四実験小学校総務主任の喬妍（QIAO Yan）氏が、今回の訪問を通じて、日中両国の青少年が健やかに成長できるよう共に努力し、両国の教育の発展を推進したい、と述べた。

次に、奈良市の本プログラムの担当でもある、学校教育部学校教育課教育推進係の鎌野慶子氏より、「奈良市の教育」についての説明があった。所在地や人口など同市の概要に続き、鹿が道路を横断している写真を使用して、同市が力を入れている世界遺産学習の説明がされ、訪問団は世界遺産学習の概念を理解することができた。その他、教育委員会の組織、学校数、目指す子ども像、教育施策などについても説明があった。質疑応答では、世界遺産学習のカリキュラムについて、奈良市にある公立校と私立校の割合、教員の副業は認められて

いるか、などの質問が挙がった。

最後に、奈良市滞在3日間の日程が案内され、訪問団から四合院の切り紙(剪紙)が、奈良市からは茶器の記念品が贈られ、表敬訪問を終えた。



歓迎のあいさつをする東畠課長（奈良市役所）

(2) 唐招提寺見学

奈良市役所をあとにした一行は、唐招提寺に向かった。唐招提寺は、唐より来日した鑑真和尚によって開かれた寺であり、奈良と中国の交流の歴史を象徴する文化遺産の1つである。

唐招提寺に到着すると、訪問団は2グループに分かれ、それぞれボランティアガイドの説明を聞きながら、境内を見学した。

鑑真和尚の墓所である開山御廟では、手を合わせる姿も見られ、御廟前に植えられた植物が、鑑真和尚の故郷である揚州市から贈られた瓊花であることがわかると、写真におさめる参加者もいた。



熱心にガイドの話を聞く団員（唐招提寺）

(3) 奈良市歓迎交流会

同日午後6時より、ホテルアジール・奈良で、奈良市教育委員会主催の歓迎交流会が催された。出席者は、奈良市教育委員会の職員、訪問校の校長先生や副校長先生、訪問団であった。

はじめに、公務の都合で出席がかなわなかった学校教育課長の東畠氏に代わり、学校教育課教育推進係長の西村愛子氏があいさつし、本日をきっかけとして、奈良市と中国の教職員の交流の輪が広がることを願っている、本日は元気に毎日を過ごしていただきたいとの思いを込めて、はつけよい鍋を用意した、この歓迎交流会で交流を深めましょう、と述べた。次に、訪問団を代表して甘肃省敦煌市教育局长の付虎(FU Hu)氏が謝辞とともに、奈良市滞在中に日本の基礎教育の経験を学びたい、とあいさつした。続いて、翌日訪問予定の奈良市立飛鳥小学校長の竹原康彦氏の乾杯の音頭により、歓談となつた。

出席者は、日中混合で4つのテーブルに分かれて鍋を囲み、終始和やかな雰囲気で歓談に興じた。

歓談の途中、訪問校の先生による学校紹介があった。奈良市立飛鳥小学校長の竹原氏、奈良市立一条高等学校副校長の錦秀知氏、奈良市立富雄第三小中学校長の石原伸浩氏より、各校の紹介や訪問時の予定について紹介があり、訪問団は翌日からの学校訪問への期待を膨らませた。

出席者は、互いの学校の話、中国で子ども達に人気のある日本のアニメなどの話題で盛り上がり、大盛況のうちに終了した。



談笑する王団長（右）と竹原校長（左）
(奈良市歓迎交流会)

(4) 奈良市立飛鳥小学校訪問

プログラム第4日の12月1日（木）午前、一行は、奈良市立飛鳥小学校を訪問した。同校は、奈良公園に隣接し「地域を見つめ、地域に誇りと愛着が持てる」子どもの育成を目指し、世界遺産学習に取り組んでいる。

到着後はじめに、多目的室で歓迎セレモニーがあった。校長の竹原康彦氏のあいさつでは、学校教育目標が、「心豊かでたくましく生きる児童の育成～関わり合い、響き合い、磨き合う～」であること、また、同校区では、保幼小中の15年間の連続した学びの保障を目標として、教育活動を行っていることが説明された。次に、訪問団を代表して、北京光明小学校主任の郭文煥（GUO Wenhuan）氏より、貴校を訪問できて嬉しい、飛鳥小学校では、カリキュラムや学校運営について学びたい、とあいさつがあった。

続いて、体育館にて全校歓迎会が開かれた。全校歓迎会は、児童の司会によって進行し、児童会による学校紹介、3・4年生による合唱、5年生による奈良の世界遺産についての発表、6年生によるソーラン節などがあり、訪問団は今回の来日で初めて接する日本の児童に興味が尽きない様子であった。最後に、児童より、手作りのしおりが訪問団にプレゼントされた。

続いて、6年生の3つのクラスで、中国教職員による授業が行われた。3クラスとも「中国の小学生生活」が紹介され、登校の様子や普段の授業の様子、行事などが紹介された。児童からは、掲示物などが全て漢字で書かれていることに驚きを感じる一方、日本の学校と似ているという声も聞かれた。

その後多目的室に戻り、質疑応答の時間が設けられた。訪問団からは、同校の教職員が笛を提げているのはなぜか、校長先生が代わると教育目標も変わるので、学校の施設面の費用はどこから出るのか、といった質問が挙がった。訪問団は、日本の教職員の人事異動について、興味があるようだったが、日本と中国は採用制度が違うため、理解するのが難しい様子だった。最後に訪問団より記念品が手渡され、玄関前で記念写真を撮って、同校の訪問を終えた。



児童に別れのあいさつをする団員ら（奈良市立飛鳥小学校）

(5) 奈良市立一条高等学校訪問

同日午後、一行は奈良市立一条高等学校を訪問した。同校は、普通科、外国語科、数理科学科、人文科学科が設置された、奈良市立で唯一の高等学校である。文武両道を目標に掲げ、多くの部が近畿大会や全国大会に出場する中、ほとんどの生徒が大学に進学する。アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践で、生徒の思考力や判断力、表現力の伸長を図っており、スマートフォンを活用した授業の取組みも注目されている。

到着後、校長の藤原和博氏によるあいさつがあり、自身が民間校長であること、作家としても活動しており、77冊の著書があること、同校は「スーパースマートスクール（SSS）」として、生徒個人のスマートフォンを授業に活用する取り組みを行っていること、などが紹介された。次に、訪問団を代表して、山西省太原市第四十八中学校長の王更生（WANG Gengsheng）氏が、有名な校長先生や熱意ある教員のいる学校を訪問できて嬉しく思う、1500年前に鑑真が海を渡り日本に仏教を伝えて以来、日中両国は互いに影響を与え合い、受け続けている。今後も手を携え、両国の教育を発展させていくことを願っている、と述べ、記念品を贈呈した。

続いて、教頭の成松亨氏より学校概要説明があり、同校の沿革や生徒数などの概要の他、4つの設置学科、特徴的な取組、時間割、年間行事、部活動、進路状況などが説明された。

次に、人文科学科3年生のクラスで中

国教職員による授業が行われた。授業は、「中国の高校生活について」と題して、山西省太原市第四十八中学校長の王更生氏が担当した。同校の校訓、時間割の他、2限と3限の間の35分の休憩時間でラジオ体操をすること、毎週月曜日には国旗と校旗の掲揚式があること、午前は4限までで、午後は2時15分から3限授業があること、授業が終わるとスポーツや弁論など関心のあることをする自由な時間があること、夕方6時から7時30分までは、自習時間であることなどが説明された。最後に、様々な学校行事に言及し、「感謝のリボン活動」、「愛のバザー」、「雷峰に学べ活動」など日本では聞き慣れない行事が紹介され、生徒は興味深そうに聞いていた。

続いて、図書館見学の後、質疑応答の時間となった。訪問団からは、アクティブラーニングを取り入れる目的、教育課程は文部科学省によって評価されるのか、民間校長になるにはどのような条件をクリアすればいいのか、中国では有名な学校があり、そこには有名な教員がいるが日本はどうか、大学入試で教員が生徒を推薦できる仕組みはあるか、などについて質問が挙がった。

最後に正門前で記念撮影を行い、同日の訪問を終えた。



笑顔で握手を交わす藤原校長（左）と王氏（右）

（6）奈良市立富雄第三小中学校訪問

プログラム第5日の12月2日（金）午前、一行は、最後の訪問校となる奈良市立富雄第三小中学校を訪問した。

同校は、1976年に奈良市立富雄第三小学校として開校した。2011年には、中学

校を併設し小中一貫校として新たなスタートを切り、委員会活動や部活動を小中合同で行うなど、小中一貫校の特徴を生かした教育活動を実施している。また、独自の英語教育や国際交流活動を積極的に行っている。

同校に到着すると、校長の石原伸浩氏や小学校教頭の田村秀治氏の出迎えを受け、ランチルームに案内され、歓迎式があった。

はじめに、校長の石原氏のあいさつがあり、歓迎の言葉と共に、本日は児童生徒や教職員と価値ある交流をしましょう、と述べた。続いて、北京光明小学校の郭文煥（GUO Wenhuan）氏があいさつし、今日は小中一貫校である貴校が実施している総合的な教育改革について学び、児童生徒や教職員と交流を深めたい、と述べ、記念品を贈呈した。

続いて、石原校長より学校紹介があった。同校は、英語教育に注力しており、フィリピンの英語教育機関を通して、オンライン英会話の授業に取り組んでいること、5年生と6年生の英語の授業は、中学の英語教員が行うこと、高校生との交流やオーストラリアの学校と交流していることなどが紹介された。

次に、2グループに分かれて、学校見学があった。地域住民も利用できる、富三ホール、木工・金工室、カウンセリングルーム、特別支援学級などを見学した。理科室の天井には、実技中の手元が見えるように、鏡が備え付けられており、関心を示す参加者もいた。

続いて、6年生の3クラスで、中国教職員による授業が行われた。授業内容は、「中国の小学生生活」であった。授業を担当した北京の小学校教員が、中国の小学校では演劇の授業があり、台本も小学生が書くことを伝えると、児童は驚いた様子だった。また、小学生に人気のあるアニメに話題が及ぶと、「僕たちと一緒に！日本とあまり変わらないね。」という声も聞かれた。

授業が終わると、教職員交流の時間が設けられた。3つのグループに分かれ、日中の教職員が知りたいことを、率直に質問し合った。中国では、公立校の教職員が公務員ではなく転勤がないこと、夏休みは教員も休みであることを知った同校の教職

員は、驚いた様子だった。訪問団からは、実際の出勤・退勤時間や、宿題の量、テストの頻度などの質問が挙がった。

最後に、訪問団は、6年生の児童と一緒に給食を体験した。訪問団からは、言葉は通じなかったが児童が可愛かった、自分たちで配膳し、行儀よく食べている姿が印象的だった、リサイクルのできるように後片付けをしていたのに驚いた、などの感想が聞かれた。

最後に校門前で記念写真を撮り、同校をあとにした。



中国教職員による授業（奈良市立富雄第三小学校）

(7) 奈良国立博物館・東大寺大仏殿見学

同日午後、奈良国立博物館のなら仏像館と東大寺大仏殿を訪問した。

なら仏像館には、飛鳥時代から鎌倉時代までの作品を中心に、約 100 点の仏像が展示されている。一行は 2 グループに分かれ、ボランティアガイドの説明を聞きながら見学した。仏教の教えや考え方、仏像の手の位置や装飾品が意味することなどについて説明を聞き、奈良の歴史や、仏教についての知識を深めた。

続いて、徒歩で奈良公園を抜け、東大寺大仏殿に向かった。東大寺塔頭清涼院住職の森本公穂氏の案内により、東大寺の歴史、聖武天皇の精神、当時の人々の様子、大仏殿創建の経緯、地震や火災での倒壊や消失、復興のことなどが説明された。訪問団は、大仏の周りを 1 周して、その大きさを体感し、森本氏の豊富な知識と興味深い説明に、引き付けられた。大仏殿創建当時から 1250 年以上の長きにわたりその姿を残す金銅八角灯籠について説明がある

と、菱格子上の美しい透し彫りを熱心に観察する様子が見られた。最後に、参道の石が、インド・中国・韓国・日本産の石であり、仏教の伝播を現していることが説明されると、訪問団は各々の足元の石を見つめ、仏教の歴史を感じることができた。

最後に、森本氏と記念写真を撮り、訪問を終えた。



森本住職の説明に聞き入る団員ら
(東大寺大仏殿)

2-3. 全体プログラム（京都）

（1）漢検 漢字博物館・図書館（漢字ミュージアム）見学

プログラム第6日の12月3日（土）午前、一行は京都市東山区の漢検 漢字博物館・図書館（漢字ミュージアム）を訪問した。

同博物館は、ただ漢字を見るだけでなく、触れる・学ぶ・楽しむ展示を通して、驚きや発見を生み出す体験型ミュージアムとして、2016年6月に開館した。館内には、日中韓3カ国の交流や相互理解を促す期待を込めてまとめられた、808字の「日中韓共同常用漢字」を葉にあしらった「日中韓共通808字の木」や、およそ5万字の漢字が四面をかざる「漢字5万字タワー」などが展示されている。

一行は、同館の館長であり、ACCUの理事でもある高坂節三氏等に迎えられた。高坂氏は、11月28日に東京で行われた、開会式・歓迎交流会でも訪問団を迎えて、同日再会を果たした。

高坂氏からは、同館が日本初の漢字についての博物館であること、漢字は中国から日本に伝わり、日本で日本文化に合わせて発展し、今の形になったこと、日中韓3カ国の共同常用漢字の制定を記念して同館が作られたことなどが紹介された。

続いて、同館の研究員であり、中国語が堪能な田中郁也氏に案内され、1階にあるシアターや漢字の歴史絵巻を見学した。金印のスタンプやひらがな・カタカナの元となった漢字を学ぶスタンプ体験もあり、漢字が現在のひらがな・カタカナに発展したこと学んだ。2階には、毎年12月に京都・清水寺で発表される「今年の漢字」が展示され、初回である1995年の「震」から、20点余の歴代の作品が展示されていた。その他、タッチパネルのかかるたや、自分で選んだ寿司ネタの漢字を当てるゲームなどがあった。漢字の知識には自信をもっている参加者も多かったが、炬燵（こたつ）など中国にはない物を当てるのに苦戦する様子が見られた。



「日中韓共通808字の木」の側で説明に聞き入る様子（漢字博物館・図書館）

（2）清水寺見学・茶道体験

同日午後、一行は暑さを感じるほどの晴天の下、清水寺を見学した。まだ紅葉が残る箇所もあり、参加者は思い思いに写真を撮り、見学を楽しんだ。

次に、高台寺月真院で茶道を体験した。厳かな雰囲気の中、はじめに、先生の説明と実演があった。続いて、訪問団を代表して2名が「お茶点て」に挑戦した。慣れない正座での挑戦だったが、皆の予想に反して上手く点てることができ、挑戦した2名の参加者は満足した様子だった。それなお茶は、今回の訪問の労をねぎらい、団長の王氏と通訳にふるまわれた。最後に高台寺の境内を見学し、京都訪問を終えた。



作法に添ってお茶を味わう団員ら（高台寺月真院）

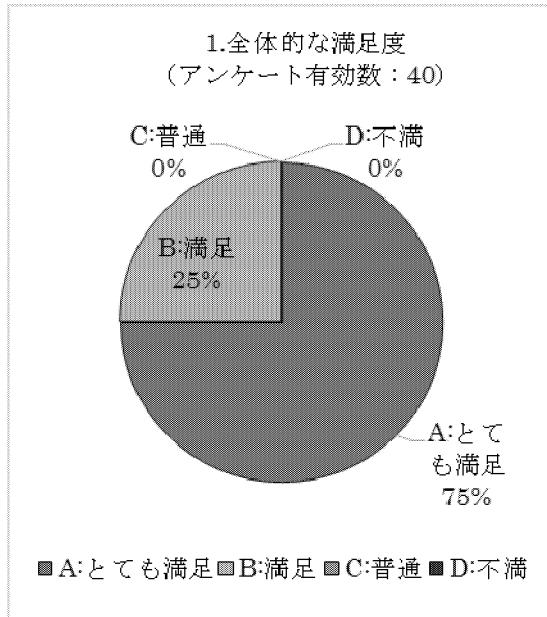
第II章

コメントと提案

1. 中国教職員
2. 受入れ教育委員会
3. 受入れ校

1. 中国教職員

◆質問1. 全体的な満足度



【主な意見】 *原文は中国語

A-1 丁育紅 団長（とても満足）

日本の各教育機関から心のこもったおもてなしをいただいた。スケジュールが合理的で、スタッフが相談しているところがまったく見えていないが、全てのことがスムーズに進んでいた。訪問校はそれぞれの特色があり、管理も整っていて、生徒がとても礼儀正しく、先生の方々も仕事熱心で、とても感心したと同時に、大変勉強になった。街も綺麗で、日本人の教養の高さにも驚いた。実り多い成果を収め、素晴らしい訪問だった。

A-2 童蘇陽 秘書長（とても満足）

全体の手配がとても行き届いて、時間の締まり加減もよかったです。日本の基礎教育の全体像を知ると同時に、各種の学校を実際に見学する機会をいただいた。学校見学が終わってから、文化体験活動も手配してくださって、とてもよかったです。

A-5 余洋（とても満足）

日本側の情熱に溢れたご接待と行き届いたご手配をいただき、とても感動した。訪

問期間中には、日本の教職員の方々と生徒の皆さんのが、日本人の仕事と勉強に対する真剣さ、まじめな態度と根性を見せてくださいました。

A-14 向一丁（とても満足）

入念な準備をしていただき、そして、行き届いたご手配と情熱の溢れたご招待を賜った。日本の教員も生徒もありのままの姿で接してくださいり、その素晴らしい姿に感銘を受けた。

B-1 王雲 団長（満足）

訪問内容は充実しており、アレンジは合理的で、手配は周到で、プログラムが秩序よく進められ、実り多い成果を収めた。

B-2 張月盈 秘書長（とても満足）

東京都の小中学校をもっと見学してみたいと思った。

B-3 劉波（満足）

全体印象はとてもよかったです。日本の教員の方々の仕事に対する真面目な態度と熱意に感服し、日本教育の先進性を感じ取った。

B-8 喬妍（とても満足）

日本人は友好的で、情熱が溢れている。手配は周到で緻密であった。プログラムは段取り良く、実りの多い訪問となつた。

B-9 馬偉蘭（満足）

心温まるご手配いただき、そして細かいところまで配慮していただいた。効率よく訪問することができた。日本の皆さんのが友好的で、人情味に溢れていた。

B-13 金曉燕（満足）

今回の訪問に満足している。短い訪問時間にも関わらず、学校の活動の見学、授業の見学及び教育制度や展望についての紹介について、いずれも深い印象を与えてくれた。

B-14 宋燕暉（とても満足）

訪問内容がとても豊富で、充実していた。講義、学校訪問、教職員との交流、児童生徒との交流などいろいろな形で日本の教育

現状を知ることができた。

B-16 龐雪梅（とても満足）

訪問校はそれぞれ特色や明確な教育理念、豊富な教育経験があった。今回の訪日は、教育について考える良い機会となった。

◆質問2. 参加目的は何か

【主な意見】*原文は中国語

A-1 丁育紅 団長

日本の学校管理の面における先進的な理念と改革措置を学び、交流活動を通じ、両国の国民の世代にわたる友好の基礎を固め、両国教育をともに発展させるため。

A-2 童蘇陽 秘書長

日本基礎教育の発展と現状を把握し、実際の見学を通じ、日本の小中高の優れた教育経験を学び、帰国後に中国の関連部門に日本の良いところを学ぶよう指示し、そして、両国友好往来の促進に貢献するため。

A-5 余洋

日本基礎教育の現状を知り、日本の学校の部活の経験を学び、日本の学校の音楽の授業を見学するため。

A-11 虞進元

日本の教育のシステム、発展と現状を知り、交流と協力をさらに深める可能性を探り、友情を深めるため。

A-14 向一丁

教育管理者の視点から日本の教育の管理办法ならびにカリキュラムを知るため。そして、教員の視点から学校の教育法、教員と生徒の姿、受験についての考え方を知るため。

B-1 王雲 団長

交流を通じ、相互理解を増進し、友情を深め、幅広い面での教育交流と協力を深化させ、両国国民、特に青少年間の交流を拡大し、日中友好の推進に貢献するため。

B-2 張月盈 秘書長

日本の小中学校の教育発展状況および日本の教員と児童生徒の学校生活や学習を自分の目で見るため。

B-3 劉波

日本の基礎教育の現状と未来への展望を知るため。日本の先進的な教育理念を学び、今後の教員生活の参考するため。日中教育分野における交流を強化し、お互いに学び、相手の長所を取り入れ、自分の短所を補い、共に発展していくため。

B-8 喬妍

日本の教育体制を学び、自分自身を通して日本に中国を紹介するため。交流を通じ、お互いの教育経験を語り合い、両国の青少年が楽しく学び、健やかに成長できるよう、教育の促進と発展に積極的に貢献するため。

B-9 馬偉蘭

日本の基礎教育の現状そして中国との相違点（例えば、カリキュラムの設置、学生評価基準、教師評価基準など）を知り、理解を深め、教養の高い市民の育成の経験を学ぶため。

B-11 劉君娜

日本教育の現状と学校管理の経験を学び、本校の管理レベルと生徒への素質教育のレベルを向上させるため。そして日本の学校と友好関係を結ぶ可能性を探り、交流と協力をさらに深めるため。

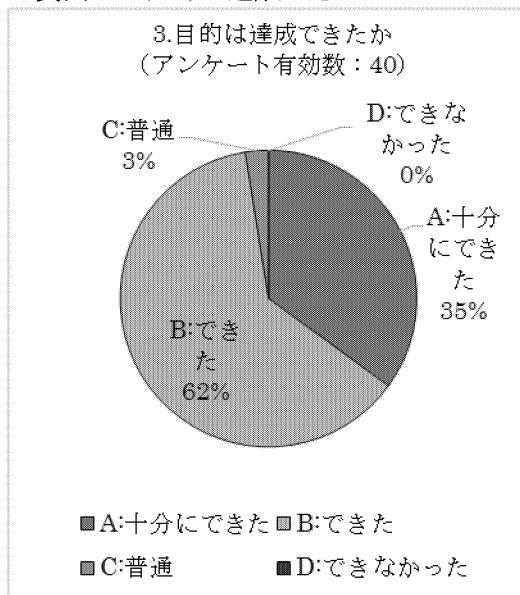
B-15 郭文煥

日本の小中学校のカリキュラムの設置と実施、授業の様子、文芸体育と科学技術教育の状況と具体策を深く理解することである。

B-17 馬健

私の目的は日本の基礎教育の現状を知り、訪問地の学校で先進な教育理念と効率的な学校管理方法を学び、訪問を通じ、日本の小中高の学校と文化交流を行うことである。

◆質問3. 目的は達成できたか



【主な意見】 *原文は中国語

A-1 丁育紅 団長（十分にできた）

7日は短かったが、日本の基礎教育についてたくさん見て、たくさん聞き、深く感銘を受けた。

A-5 余洋（できた）

文部科学省や高知県教育委員会を表敬訪問し、私立校、公立校、特別支援学校などを訪問し、部活動も音楽の授業も見学だったので、目的は達成できたと思う。

A-11 盧進元（できた）

訪問団の人数が多く、訪問時間も限られていたので、今後の交流についての話ができず、個人的には心残りがある。

A-14 向一丁（できた）

日本のイメージが明確なものになり、日本の学校の緻密な管理体制に感心した。

B-1 王雲 団長（できた）

文部科学省並びに奈良市教育委員会に表敬訪問し、両国の教育者の間で交流ができ、学校訪問と交流を通じ、教職員の間の友情も深まった。

B-3 劉波（できた）

日程が充実していて、日本教育の基本的

な仕組みを理解でき、自分自身のこれから の教育活動にヒントを得た。今後も交流ルートを切り開き、多視点から相互理解を深めていく必要があると思う。

B-8 喬妍（十分にできた）

今回の訪日を通じ、日本人について基本的なイメージができた。日本人は教養が高く、自己管理能力が高い。「生きる力」の育成は、教育の重要な一環であることを改めて思った。

B-9 馬偉蘭（できた）

1週間の交流を通じ、日本の基礎教育について基本的に理解できた。児童生徒の生きる力、生活習慣と強い心の育成に力を入れて取り組んでいることに感心した。たくさんの場面で日本の生徒が細かいところまで気を遣ってくれたことがとても印象深かった。これは一人の力でできることではなく、日本の大和民族全体の力だと感じている。

B-15 郭文煥（普通）

全体的なイメージはできたが、日本教育への深い理解がまだ不十分だと思う。小中学校を見学させていただき、学校全体の紹介は具体的である一方、教員はいかにして学生のニーズに応じ授業方法を探り出しているのか、実際の授業に対する直接な体験がまだ不十分だと思う。

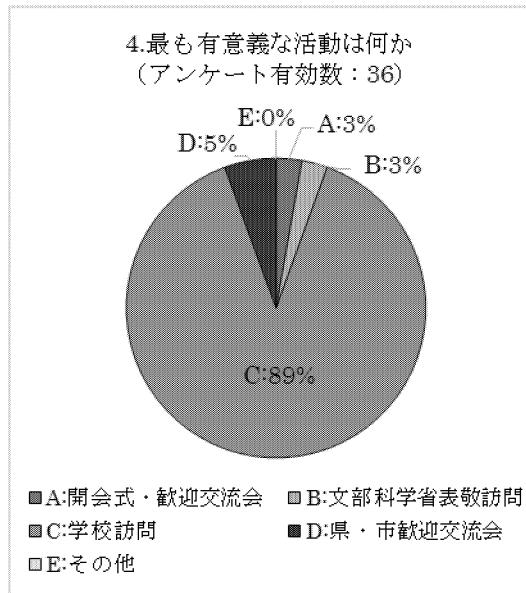
B-17 馬健（できた）

文部科学省と奈良市教育委員会への表敬訪問を通じ、日本の初等中等教育や奈良市の教育概要説明を聞き、日本の基礎教育と現状を理解することができた。学校訪問を通じ、日本教育への理解を深めることができた。

B-20 付虎（十分にできた）

教育機関、学校、史跡の訪問と通して、日本教職員と交流できた。当初の目的であった、「日本の先進的な教育理念と経験を学び、日本側との交流と理解を深め、日本の風土と人情と歴史文化に触れてみたい」という私の目的を達成することができた。

◆質問4. 最も有意義な活動は何か



【主な意見】*原文は中国語

A-1 丁育紅 団長（学校訪問）

学校の細やかな管理および教職員の仕事熱心な姿は手本にすべきだと思う。

A-11 盧進元（文部科学省表敬訪問）

普段の職務内容から日本の教育管理の抱える問題と発展の方向性や計画を知りたかったので、文部科学省表敬訪問が有意義だった。

A-14 向一丁（高知県歓送迎会）

歓迎交流会を通じ、相互理解を増進し、友情を深め、教育理念に関する深く交流ができ、雰囲気がとても良かった。

B-1 王雲 団長（学校訪問）

学校訪問は両国教職員と児童生徒が交流を深めるのに最も効果的な方法で、両国が学び合いながらともに発展することにもつながると思う。

B-2 張月盈 秘書長（学校訪問）

学校に入り、実際の状況を自分の目で確かめることができた。

B-3 劉波（学校訪問）

基礎教育の現場で働く者として、日本の教育現場の教員の状況が知りたかったので、

学校訪問を通して実現できた。

B-5 梁美紅（開会式・歓迎交流会）

歓迎交流会で両国の教員が共に歌を歌って盛り上がった。そしてお互いに関心を持っていることについて交流し、友情を深めることができ、忘れ難い歓迎交流会だった。

B-8 喬妍（学校訪問）

学校訪問を通じ、日本の小中学生の学校生活と学習状況について全体的に理解でき、深い印象が残った。今後の参考にしたいことがたくさんあった。

B-9 馬偉蘭（文部科学省表敬訪問）

文部科学省へ表敬訪問し、日本初等中等教育についての講義を受け、とても勉強になった。学校訪問の前に、講義を受けることで、実際の現地交流のための事前準備ができた。

B-15 郭文煥（学校訪問）

学校こそ教育活動の現場であり、日本の学校を訪問することで、教員と生徒のことを知り、教育現場を実感できた。訪問校では、独自の教育に重点を置きながら見学内容をアレンジしていただければ、もっとわかりやすくなると思う。

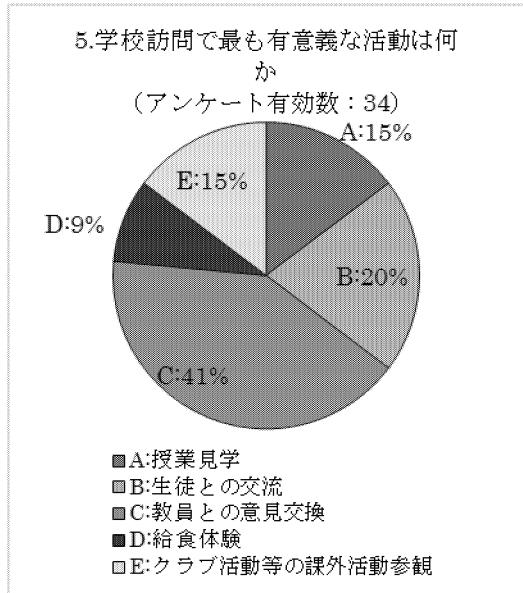
B-17 馬健（学校訪問）

学校訪問を通じ、実際に日本の教育現状を知ることができた。授業見学、交流、報告会など様々な形を通じ、学校管理、授業、教員育成などについて日本教育の実情を知ることができて、今後の教員生活の参考になった。

B-20 付虎（学校訪問）

学校を訪問し、授業を見学することで、具体的な日本教育の発展状況、教育特色および教育制度を知ることができた。そして日本の教職員と生徒との交流を通じ、日本と日本教育に対する理解が更に深まった。

◆質問5. 学校訪問で最も有意義な活動は何か



【主な意見】 *原文は中国語

A-1 丁育紅 団長 (授業見学)

中村特別支援学校で見た光景はとても感動的であった。教員は愛を持って児童生徒に接し、何度も何度も丁寧に教えていた。まるで自分の家族のように子どもたちに接していた。

A-11 盧進元 (教員との意見交換)

教員は学校で重要な働きをしている。教員との交流を通じ、学びあい、教育のレベルをともに高められると思う。

A-14 向一丁 (授業見学)

百聞は一見に如かず。心で聞き、心で感じ、実際の教育現場に入ってからはじめて教育の真髄を理解することができる。

B-1 王雲 団長 (授業見学)

すべての活動がよかったです、限られた時間の中で、授業見学が一番効果的で、印象が深く残った。

B-2 張月盈 秘書長 (生徒との交流)

児童生徒との交流を通じ、日本の小中学生の学校生活の状況を知り、中国の現状と比較することができた。自分の強みを維持しながら、不足を補っていきたいと思う。

B-3 劉波 (給食体験)

児童生徒への教育は授業の中だけ行われるのではなく、毎日の生活に浸透していると改めて感じた。

B-8 喬妍 (給食体験)

日本の児童にとっては普段どおりの給食だが、児童が良い習慣を身につけていることと礼儀正しさを身にしみて感じた。そして、私たち中国教職員への尊敬と配慮も感じた。

B-9 馬偉蘭 (給食体験)

給食体験が一番印象深く、富雄第三小学校の児童がとても可愛かった。児童が私たちを席に案内し、歓迎の挨拶を述べ、情熱溢れる歓迎を受けて感動した。児童が良い習慣を身に付け、自分たちのことは自分たちで行い、争うことなく静かに並び、静かに食べている姿を目の当たりにし、みんな偉いと感服した。

B-11 劉君娜 (教員との意見交換)

学校の基本的な状況を知ることができたし、質疑応答部分がとても参考になった。

B-15 郭文煥 (教員との意見交換)

教員との意見交換を通じ、学校の状況を知ることができた。一部の訪問校では教員と交流する機会がなかったのが残念だった。

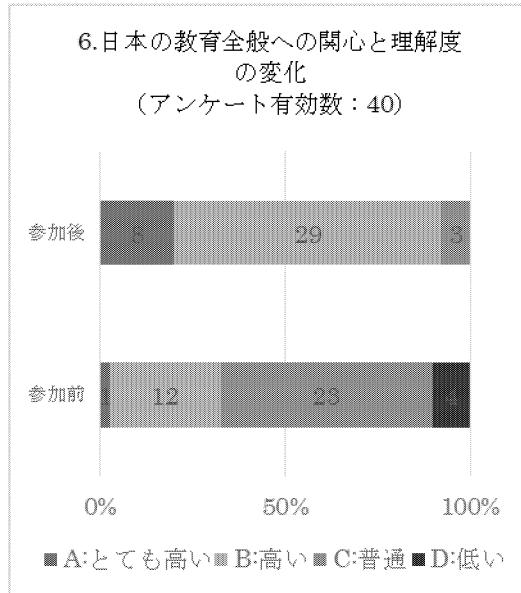
B-18 高泳錦 (生徒との交流)

児童生徒との交流を通じ、日本の教育の現状や児童生徒の状態を知ることができた。そして彼らの自分の生活に対する考え方や、これからグローバル社会に対する期待を聞くことができた。

B-20 付虎 (クラブ活動等の課外活動)

最も知りたかったのは、芸術、体育、応用技能、道徳教養などの面での具体的な活動や取組であった。時間の関係で、もっと深く見学することができなかつたのは残念であった。

◆質問6. 日本の教育全般への関心と理解度の変化



【主な意見】 *原文は中国語

A-1 丁育紅 団長（高い→とても高い）

日本はヨーロッパ諸国と同じ、緻密な管理を行っている。教員の給与を一般の公務員より優遇するというところは勉強すべきだと思う。訪問後は日本教育に対する理解が深まり、これからも引き続き関心を寄せたいと思っている。

A-2 童蘇陽 秘書長（普通→高い）

日本的小中高学校及び各種の特色のある基礎教育機関を実際に見学し、日本の基礎教育の現況を知り、理解を深めた。帰国後はインターネットや本などを通じ、日本の教育制度をさらに理解し、中国教育の発展の参考にさせていただきたいと思う。

A-5 余洋（高い→とても高い）

日本は先進国であり、教育重視という方針は第二次世界大戦後の急速な復興のため、日本がとった国策の一つである。今回の訪問を通じ、中国の「十年樹木、百年樹人」という諺への理解を深めた。これからも日本教育の発展に目を向け、特に「学習指導要領」の具体的な改善に注目したい。微力ながら、これからの中日教育の発展に尽力したいと思っている。

A-11 袁進元（普通→高い）

今回のプログラムを通じ、日本の教育改革と現状を知り、実際に学校を訪問し、日本教育への認識を深めた。日本教育には独自の特徴と長所があり、日中双方が教育の理念や方法、そして学校管理について学び合い、両国の教育をともに発展させ、それぞれの国の教育措置を紹介し、国民の友情が深めることができるとと思う。

A-14 向一丁（普通→高い）

訪日前は、日本に対する理解が限られていた。このプログラムを通じ、日本に対する関心が高まり、日本の教員に敬う気持ちが生まれ、日本の文化にも感心した。

B-2 張月盈 秘書長（低い→普通）

今回のプログラムは、全体的な政策の紹介があり、具体的な交流も含まれていたため、日本の初等中等教育の全体像がわかつた。これから更に勉強し、理解する必要があると改めて思った。

B-3 劉波（普通→高い）

日本は先進的な教育理念を有しており、大変参考になった。これからも関心を払っていきたいと思っている。

B-8 喬妍（高い→高い）

このプログラムを通じ、日本は児童生徒の堅実な学力と生きる力という2つの力の育成に力を入れていることを実感した。児童生徒は知識を学び、技能を高め、学力と行動力を共に身につけていると感じた。

B-9 馬偉蘭（高い→高い）

学校訪問や交流を通じ、日本の教育について、ある程度の理解ができた。日本の基礎教育において、児童生徒の生きる力の育成や習慣付けするための教育は参考になると感じた。また日本の教育は細かいところまで行われていると感じた。しかし、時間に限りがあり、児童生徒がいかにして積極的に授業に関わり、教員はいかに生徒の質問に答えるのかについては具体的に把握することができなかった。今後はそのような見学内容もアレンジしていただければと思う。

B-10 王更生（高い→とても高い）

日中両国は似た伝統文化を有している近隣国であり、日本の教育に対し興味を持つていた。参加後は日本の教育に対する理解を深め、日本の教育の実績と成果に感服し、日本の教育に更に興味をもった。

B-15 郭文煥（普通→高い）

これまで日本の教育に対するイメージはあいまいで、自分の目で確かめられなかつた。今回のプログラムを通じ、日本の教育の全体的なことを知ることができ、日本の教育の強みについても認識を深めた。中国に帰ったら自分の仕事につながると思っている。

B-16 龐雪梅（低い→高い）

訪日前は日本の教育についてあまり知らず、人材育成において日本は良い成果を遂げていると知っているくらいだった。参加後は日本の教育の全体的な仕組み、管理機関の設置、カリキュラムの設置の状況を知ることができた。両国の教育の似ている部分にも気づいた。そして日本は生徒の進路や就職計画を重視していると分かった。

B-17 馬健（普通→普通）

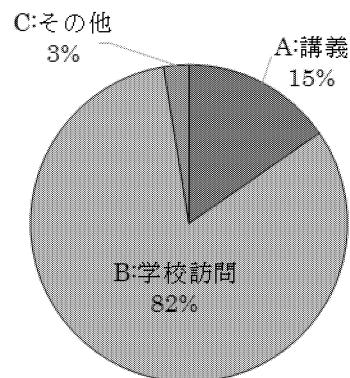
訪日前は日本の教育への関心は普通程度だった。日本と中国は同じアジア国家であり、教育においても似たところが多い。しかも日中文化交流や人的往来が盛んであり、互いにたくさんのこと学び合った経緯もある。参加後は日中両国の教育分野において似ていることがやはり多いと思った。例えば学制、授業時間数、設置科目、部活などである。そして両国は共に教育改革を展開している。これからは教育の相違点に目を向けてみたいと思う。

B-20 付虎（普通→とても高い）

実際の見学を通じ、日中両国の教育制度、体制を比較してみると、相通じるところが多いと気づいた。そして相違点もあった。両国は互いに長所を保ちながら、不足を補い、相手の強みを発見し、勉強すべきだと思う。

◆質問7. 日本の教育の理解に役立った項目

7.日本の教育の理解に最も役に立った活動
(アンケート有効数：39)



■A:講義 ■B:学校訪問 ■C:その他

【主な意見】 *原文は中国語**A-1 丁育紅 団長（講義）**

日本の教育制度や現状について全体的な理解ができた。

A-5 余洋（講義）

日本の基礎教育の全般を把握し、中国の教育の発展の参考になると思う。

A-11 盧進元（学校訪問）

学校現場を実際に見ることができ、特に教員や生徒と直に交流することによって、教員と生徒の本音がわかつた。

A-14 向一丁（学校訪問）

中村特別支援学校を見学した際に、とても感動した。日本の教職員の児童生徒への心からの愛を感じた。日本人の教職員が持っている責任感と仕事に対する誇りに感服した。

B-1 王雲 団長（講義）

文部科学省の講義を受け、とても勉強になった。そして今回、訪問団が日本の児童生徒に向けて、中国の学生の一日をテーマとする授業をさせていただいた。この授業も日本の教員や児童生徒の共感を呼んだと感じている。

B-3 劉波（学校訪問）

学校訪問で両国の教職員と児童生徒がフランクに向かって話し、実際にクラスに入り、授業を見学したり、授業をさせたりすることによって、両国の相違点に気づくことができ、交流を深め、学び合うという目的を達成したと思う。

B-8 喬妍（学校訪問）

実際の授業見学を通じ、日本教育の体制を知ることができた。このような教育体制の下で、日本の児童生徒はすくすくと成長できると実感した。

B-9 馬偉蘭（学校訪問）

理解を深めるには、現場に行って感じ取るより良い方法はないと思う。学校訪問で実際に体験するのが一番の方法だと思っている。

B-12 範懷宇（学校訪問）

児童生徒の言葉、行動、教養は学校教育の成果の一番の顕れだと思う。学校施設や環境も学校文化の一部だと思う。

B-17 馬健（学校訪問）

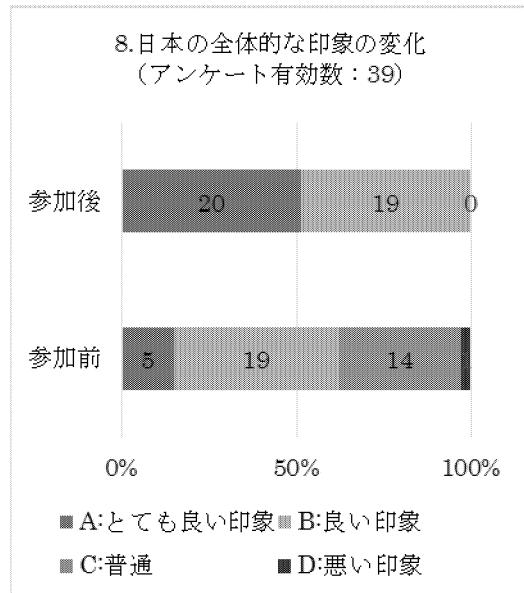
日本教育を理解するためには、日本の小・中・高等学校を訪問することが必要だと思っている。学校訪問を通じ、校長先生の学校概要説明を聞き、教職員や児童生徒と交流し、校内や授業を見学することで、日本の教育現状を知ることができたと思う。数日続けて同じ学校を訪問できればその理解が更に深まると思う。

B-18 高泳錦（講義）

講義を通じ、日本の教育の概要、現状と今後の発展方向を分かりやすく紹介していただいた。日中の教育を比べてみることができた。

B-20 付虎（学校訪問）

学校訪問を通じ、日本の教育発展の現状とレベルを更に理解することができ、日本の経験と先進的な教育方法に学ぶことができた。

◆質問8. 日本の全体的な印象の変化

【主な意見】 *原文は中国語

A-1 丁育紅 団長（良い→良い）

昔から日本の印象は良かった。今回の訪問を通じ、更に印象が良くなつた。

A-2 童蘇陽 秘書長（良い→良い）

日本人は時間厳守で、ルールをきちんと守り、情熱溢れて、とても友好的な印象である。

A-5 余洋（普通→良い）

日中両国は2000年あまりの友好交流の歴史を有している。近年、日中関係は厳しい局面に陥ってしまったが、日本国民、特に青少年は友好的で、礼儀正しくて、良い子ばかりである。今回のプログラムを通じ、日本人と友情を深めた。このプログラムが引き続き展開できるよう望んでいる。

A-11 虞進元（良い→良い）

以前から日本は文明国家であることを知っていたため、この度の訪問で経験したことはそこまで驚いていない。

A-14 向一丁（良い→とても良い）

日本人は誠実で、思いやりがあり、命を大切にする民族だと思う。

B-1 王雲 団長（普通→良い）

参加後には、日本の社会秩序の良さ、国民の教養の高さと礼儀正しさに感心し、日本は調和のとれた安定な社会であり、環境の美しい国だと思うようになった。

B-2 張月盈 秘書長（普通→良い）

日本人は真面目で、仕事をおろそかにしないと感じた。日中両国は長い文化交流の歴史を有し、社会イデオロギーに違いがあるが、民間の交流は絶えることなく続いている。ほとんどの日本国民は平和を愛し、文化交流に興味を持っており、日中間の架け橋になってもらえると分かった。

B-6 尚蘭英（とても良い→とても良い）

日本語学習者として、そして日本語の教員として、何度か日本を訪れることがあるが、毎回もっと日本を知りたいという気持ちでいっぱい、今回も実り多い成果を得た。

B-8 喬妍（とても良い→とても良い）

日本国民が高い教養を持ち、体制が健全で、都市環境が綺麗で、社会秩序が良く、国民が友好的で、とても良い印象を与えてくれた。

B-9 馬偉蘭（とても良い→とても良い）

今回の活動を通じ、日本国民の真面目さ、勤勉さを感じ取ることができ、そして都市の環境が綺麗で、みんなが社会秩序を守っていると感じた。奈良市民の世界遺産に対する愛を感じた。

B-17 馬健（良い→良い）

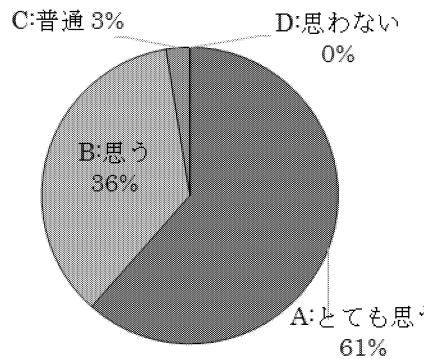
今回の活動を通じ日本への印象がほぼ変わっていないというのは、昔から日本の国民や日本文化に対するマイナスな印象を持っていなかったからである。日本人の礼儀正しさは世界の手本でも言えるであろう。今回の活動を通じ、日本人が自律的に、礼儀正しく行動する姿を目にした。

B-20 付虎（良い→とても良い）

日本人の勤勉な仕事ぶりを知る機会を得、その真面目さに感服している。本当に尊敬するに値すると思い、勉強になった。

◆質問9. 日本の教育、文化を更に学びたいか

9.日本の教育文化を更に学びたいか
(アンケート有効数: 39)

**【主な意見】 *原文は中国語****A-1 丁育紅 団長（とても思う）**

今回の訪問期間は短く、深く細かく質問することができなかつたが、これからもっと日本について学びたいと思う。

A-2 童蘇陽 秘書長（とても思う）

これから日本語を学びたいと思っている。日本文化をもっと知りたい。

A-5 余洋（とても思う）

視野を広げ、日本をもっと知りたいと思っている。

A-11 盧進元（思う）

深く理解することは交流と協力の前提であると思っている。

B-1 王雲 団長（思う）

日本の「生きる力」を培う教育理念の下で、児童生徒の主体性と学ぶ意欲をいかにして育んでいたら良いか、いかにして民族精神と民族文化の継承と発展を重視しながら、地域貢献につながる教育を開拓していくかについて、さらに学びたいと思っている。

B-2 張月盈 秘書長（思う）

今後更に日本の教育と文化について学び、

日中両国の相互理解を促進し、両国間のわだかまりを取り除いていきたいと思っている。

B-6 尚蘭英（とても思う）

さらに日本を知りたい。そして私が知っている日本を自分の生徒に伝えたい。日本語を勉強している中国人の生徒に、異文化を理解しながら、日本語を勉強してもらいたいと思う。

B-8 喬妍（思う）

近隣である日本と長期にわたって実りある教育交流を行うことができれば、両国の教育のこれから発展につながると思う。

B-9 馬偉蘭（思う）

日本の教育と文化にとても興味を持っている。これからもし機会があれば、さらに日本の教育と文化を学びたいと思っている。

B-11 劉君娜（とても思う）

1週間の滞在時間が一瞬で過ぎたように感じた。これからもチャンスがあれば、日本を訪れ、日本の教育、文化そして各分野についてもっと知りたいと思っている。

B-17 馬健（普通）

日本の教育と文化は中国と良く似ているので、今後は両国の違うところを見てみたい、視野を広げていきたいと思う。もちろんこれからも日本の教育改革に引き続き注目していきたいと思っている。

B-20 付虎（とても思う）

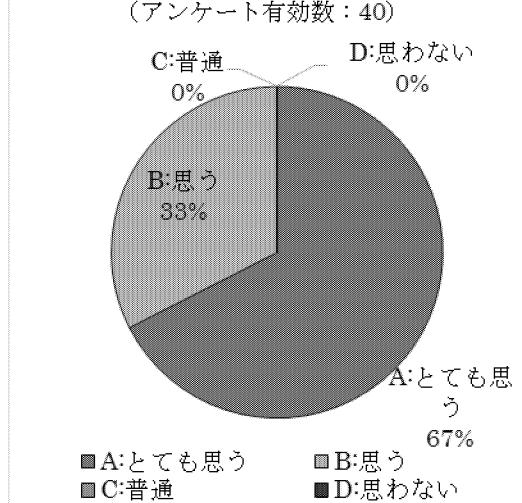
これからも日本を訪問したい。そして、日本の教職員を中国にお招きしたいと思っている。

B-13 金曉燕（とても思う）

これからさらに日本の基礎教育について学びたい。そして機会があれば、自分の生徒を連れて日本に交流しに行きたい。自分の生徒にも本当の日本を知ってもらいたい。

◆質問10. プログラム体験を生徒や同僚に報告しようと考えているか

10.今回の経験や体験を同僚や児童生徒に報告しようと考えているか
(アンケート有効数: 40)



【主な意見】 *原文は中国語

A-1 丁育紅 団長（とても思う）

この度の体験を同僚と共有したいと思っている。

A-5 余洋（思う）

私の目に映った日本、そして今の日本を生徒や同僚にも見てもらいたい。両国国民の理解を促進し、連絡を取りつつ、両国の教員と生徒の友情を深めていきたいと思っている。

A-11 盧進元（思う）

海外の状況と自分の体験を紹介するのも私の仕事の一部であり、同僚一人ひとりに伝えたいと思っている。

A-14 向一丁（とても思う）

両国の文化や伝統には違いがあるが、優れた文化を伝承し、命を大切に、そして責任を持って教育活動に尽くすことは世界各国の教育に携わっている人々の共通の使命であると思っている。

B-1 王雲 団長（思う）

日本の経験と先進な教育理念を学び、生徒がこれから人類社会に大きく貢献できるよう教育を展開していきたいと思う。

B-3 劉波（とても思う）

日中両国の似ている点と異なる点を多くの人に知ってもらいたい。他人の長所を学び、自分の短所を補って、自信を持ってもらいたい。

B-8 喬妍（とても思う）

今回の訪問で見たことや聞いたことを周りの人に教えたいと思っている。両国国民の友情を深め、お互いに学びあい、共に発展していきたいと思っている。

B-9 馬偉蘭（思う）

今回の訪問経験や感じたことを同僚や生徒に教えたいと思う。みんなに「私の目に映った日本と日本の教育」を知ってもらい、学び合い、共に前に進めていきたいと思っている。

B-10 王更生（とても思う）

もちろん伝えたい。今回の訪問の収穫を学校と同僚に報告するだけではなく、訪日で学んだ良い経験や方法を自分の教育活動に活用していきたい。これも今回の訪問の重要な目的である。

B-15 郭文煥（思う）

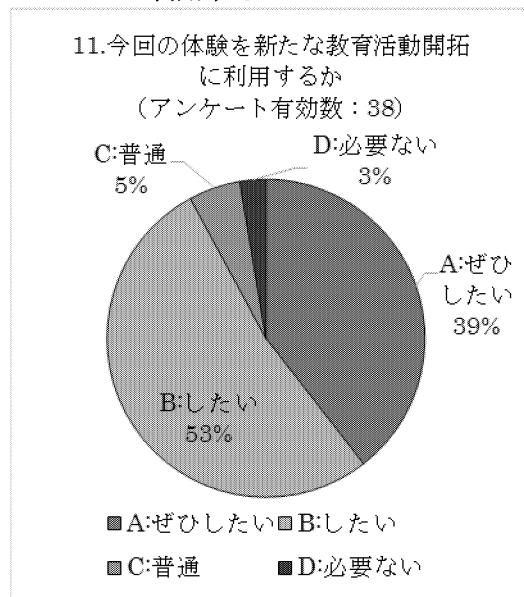
帰国後の報告は今回の訪問の目的の一つでもある。必ず自分の得たものを同僚と共にし、自分の考えを同僚と交換したいと思っている。

B-17 馬健（思う）

訪日前、帰国後にプログラムの活動内容と経験を報告すると学校に求められたので、必ず報告する。そして、今回の訪問で得た情報や受けた影響を同僚や生徒に伝えたい。自分の生徒をきちんと教育し、生徒の全面的発達を目指して教育を行っていきたいと思っている。

B-20 付虎（とても思う）

今回の訪日は実り多い成果を収めた。自分の体験を語ることで、地元の教員と生徒にも日本の教育と文化を知ってもらいたい。

◆質問 11. 今回の体験を新たな教育活動開拓に利用するか**【主な意見】 *原文は中国語****A-5 余洋（したい）**

学んだことを実際に活用することは、私を含む訪問団員の全ての教職員が訪日した目的もある。

A-14 向一丁（したい）

生徒にもっと大きなプラットフォームと、広い成長スペースを与えたなら、生徒はもっと高く、遠くへ羽ばたけると思う。これからは、点数だけで生徒を見るのではなく、社会の中で生きていくために必要なことを教えたいと思うようになった。

B-1 王雲 団長（したい）

生徒による放課後の清掃活動、栄養に配慮した給食、学力三要素「1.知識・技能の確実な習得、2.（1を基にした）思考力・判断力・表現力、3.主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」などを取り入れたいと思っている。

B-3 劉波（したい）

現状踏まえて、徐々に展開していきたい。

B-6 尚蘭英（ぜひしたい）

日本の教員は仕事時間外でも無償で生徒のために多くの業務をこなし、生徒を愛し

ていると感じた。日本の教員のこういう姿勢を学び、帰国後は自分の生徒指導の実践に活用したいと思う。

B-8 喬妍（したい）

中国には「三人行れば必ず我が師有り」ということわざがある。今回の経験をこれからの中の教育活動に活用し、特に生徒の生きる力の育成に力を入れていきたいと思っている。

B-9 馬偉蘭（したい）

そうしたいと思う。例えば、清掃活動の方法を改善したい。清掃は、保護者を頼らずに、生徒の自分の力でやってもらうようにしたい。また、奈良市立一条高等学校の藤原校長先生のように、社会の様々な資源を学校に取り入れ、生徒に学習と実践の機会を提供したいと思う。

B-11 劉君娜（したい）

帰国後は、今後の教育活動に今回の訪問で学んだ教育方法を取り入れたいと思う。例えば、生徒との交流を深め、心の関わりを持ちたい。生徒の礼儀作法や環境保護の意識向上などに取り組みたいと思っている。

B-15 郭文煥（普通）

日本の教育現場で見たことや体験したことを見一度分析し、自分の仕事と結び付け、改善策を講じたい。

B-17 馬健（したい）

日本で体験した児童生徒の責任感や職業意識を育成するための活動を中国の学校に紹介したいと思っている。例えば、富雄第三小中学校で生徒たちが自分で給食を配膳し、ゴミを分別してことや、神田女学園の手洗い場やトイレの壁に清掃方法が掲出されていたことなど。現状に応じて、具体的な経験を生徒の管理に活用していきたいと思っている。

B-20 付虎（ぜひしたい）

奈良市の世界遺産学習の経験と方法を学び、帰国後は我が市でも展開していきたいと思う。そして、今後は奈良市の学校のICT教育の理念と方法を学びたい。

◆質問12. 交流を継続したいか

12.日本の学校や教職員との交流を希望するか
(アンケート有効数: 39)

C:普通 D:思わない

3% 0%

B:思う 46%

A:とても思う 51%

■A:とても思う ■B:思う

■C:普通

■D:思わない

【主な意見】 *原文は中国語

A-5 余洋（とても思う）

都市と都市との交流を強化したい。学校間の連絡を緊密にし、さらに連携協定を結び、生徒と教員の相互派遣を実現したい。そして教育だけではなく、文化面の交流も強化したいと思っている。

A-11 盧進元（思う）

交流を通じ、相互理解と両国の学校間の交流を深めていきたい。具体的には下記の3点である。

①学校間の交流を推進する。日中両国の学校がともにシンポジウムを行ったりして、管理者層が相互訪問をし、連携協力関係を結ぶ。

②教員交流を推進する。両国は教員の相互派遣を実現し、相手国の教育の現場を見学し、交流し、ともに成長する。

③児童生徒交流を推進する。生徒を相手国の学校に派遣し、授業を体験し、ホームステイなどで交流を深め、両国青少年の間の友情を深化させ、日中両国の今後の長期的な友好に繋げる。

A-14 向一丁（思う）

中国の生徒にいい習慣を身につけてもらうには、実際に日本に来てもらって、体験してもらうより良い方法はない。

B-1 王雲 団長（思う）

今後も今回訪問した学校と交流を続けていきたい。そして、できれば長期にわたる安定した学校間の友好関係を構築していきたいと思っている。

B-8 喬妍（思う）

同じく教育に携わっている日本の方々と長期的な教育交流活動を行いたいと思っている。WeChat のようなアプリやメールなど、様々な通信手段を使って実現させたいと思っている。

B-9 馬偉蘭（思う）

続けたいと思っている。プログラム参加前に、一定程度の交流をし、相手が何を求めているのか、何に興味を持っているのかを知り、双方の興味のあることを探し出す必要がある。

B-17 馬健（思う）

訪問した小学校と交流を続けたいと思っている。本校は数年前に、日本の学校と絵や書道作品の交換交流をしたことがある。インターネットを活用し、これからも日本の学校と交流をして、両国の同じ年の子どもたちが交流する機会を与える。日本の教員の訪中も歓迎する。

B-18 高泳錦（とても思う）

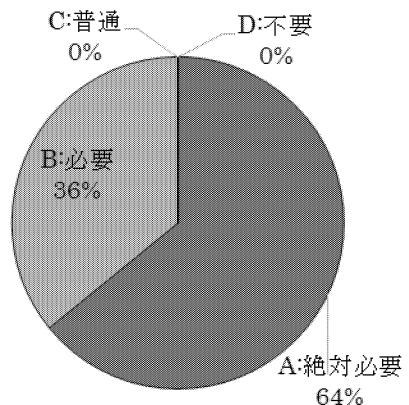
今回の訪問校と友好関係を結び、文化、芸術、環境保護、科学技術、体育などの多岐に渡る分野において交流活動を行いたい。そして相互訪問を実施したい。滞在中は、日本人と中国人の生徒にペアになってもらい、一緒に授業を受け、討論してもらいたい。双方は様々な形でさらに自分の国の中を積極的に発信し、相互理解と協力を増進していきたいと思っている。

B-20 付虎（とても思う）

日本の教員との交流をさらに深めたい。そして各層、例えば、教育行政部門の間、校長や教員の間で様々なレベルでの交流を推し進めていきたい。共に活動することで、相手国の教育理念、制度又は教育方法について交流を深め、学び合っていきたいと思っている。

◆質問 13. 本プログラムは継続必要か

13.本プログラムの継続は必要か
(アンケート有効数: 39)



■A:絶対必要 ■B:必要 ■C:普通 ■D:不要

【主な意見】 *原文は中国語**A-1 丁育紅 団長（絶対必要）**

理解を深め、協力を進化させるため絶対必要である。

A-5 余洋（必要）

教員と生徒の交流は両国国民の交流を促進することができ、長期的な友好往来は両国国民の相互理解と友好促進に資することになると思う。

A-11 蘆進元（必要）

教職員交流を通じて、双方の理解を深めることができ、今後の全面的な交流につながると思う。

A-14 向一丁（絶対必要）

本プログラムは両国教員に交流の場を提供している。相互訪問を通じ、教員がお互いに学びあい、理解を深めていくことが重要だと思っている。

B-1 王雲 団長（絶対必要）

絶対継続してもらいたい。このプログラムは日中両国の教育交流分野における大きなプラットフォームであり、両国の幾世代にもわたる友好、そしてアジアひいては世界の平和と発展に大きく資するプログラムだと考えている。

B-2 張月盈 秘書長（必要）

両国の友好関係は国民の友好感情にあり、日中文化交流は両国教職員の交流からさらに幅広い面に広げ、両国の民間交流と理解の基礎となっていくことを期待している。

B-8 喬妍（絶対必要）

両国がお互いに学びあい、共に成長し、視野を広げ、時代と共に進み、絶えず教育理念と方法を改善し、共に発展していくために、このプログラムの継続は絶対必要だと思っている。

B-9 馬偉蘭（必要）

継続すべきだと思う。日中両国は海を一つ隔てている近隣であり、長い文化交流の歴史がある。双方が学びあい、共に発展し、Win-Win の関係を実現するために、交流が必要である。

B-10 王更生（絶対必要）

教育を発展させるために、互いに学び合う必要がある。教育はオープンで、包容的であるべきだ。世界各国の教育の知恵と特色を取り入れることで、絶えず自国の教育を豊かにし、さらに発展させるとと思う。似た伝統文化を有する日中両国の教育の発展と促進は、両国の交流を深め、共に前へ発展していくことにつながっていると思う。

B-11 劉君娜（絶対必要）

このような交流活動はとても必要である。同時に、日本の教育に携わっている方々にも中国にお越しいただき、中国の教育と文化をもっと知ってもらいたいと思っている。

B-17 馬健（必要）

継続すべきだと思う。現在の日本の教育は特色のある教育を推進し、大学受験対策を講じたり、改革したりしていると聞いており、今後は教育改革に焦点を絞って訪問交流を展開していけたらと思う。

B-20 付虎（絶対必要）

絶対必要だと思う。このような交流を通じ、経験を学び、友情を深め、両国の教育の発展を促進できると思っている。

◆質問 14. その他気付いた点

【主な意見】*原文は中国語

A-14 向一丁

伝統文化への伝承は素晴らしかった。

B-1 王雲 団長

日本の生徒は自力で清掃活動を行い、良い衛生習慣を身につけている。

B-2 張月盈 秘書長

訪問したすべての学校の清潔さが印象的だった。勉強になった。

B-3 劉波

車がクラクションを鳴らさない。バスの広告は商業広告が少なく、公益広告が多い。

B-6 尚蘭英

日本は細部まで考えている。例えば清掃の習慣の教育、後は学校の手洗い場の蛇口のところに石鹼がぶら下がっていることに気づいた。

B-8 喬妍

ゴミの分別。牛乳パックの回収処理などから良い衛生習慣と生活習慣の習得には教育が寄与していると感じた。

B-9 馬偉蘭

富雄第三小中学校の滑り台の設計がとてもよかったです。児童生徒の遊び場であり、緊急事の対策にもなる。飲み終わった牛乳パックは綺麗に洗ってから回収する。環境への配慮を身のまわりの小さなことから始めるところが勉強になった。

B-16 龐雪梅

学校の中に、児童生徒の作品や学校からの助言がたくさん掲出されていた。

B-20 付虎

とても印象深かった。日本の自然環境は豊かで、綺麗である。社会秩序がとても良い。

2. 受入れ教育委員会

第1班

●高知県教育委員会

主任管理主事 今西 一成

プログラムの全体的な印象

- 中国の教職員の方々は、日本の教育におけるシステムに非常に関心が高いように感じた。また、教員の人事や配置等に高い関心を持って話を聞いていたように感じた。
- 各学校訪問においても、中国にはない学校（特別支援学校・農業高等学校）には、興味関心が高く、熱心に見学や質疑をしており、中国の教職員の方々にとっても有意義なものになったのではないかと感じた。

プログラム成果

- 中国の教職員の方々には、日本（高知県）の教育現場を見学してもらい、より理解を深めてもらうことができたのではないかと思う。また我々も中国教職員との交流の中で中国の方のことを理解できたのではないかと思う。意見交換や交流会の中で中国の教育事情や教育現場のことを聞くことができ、海外の教育についても認識が広がったようだ。

苦労した点

- 初めてのことでの中国教職員の方のことが全く分からず状態での企画・運営を行ったので、どこまで準備すればいいのかが困難だった。また、言葉においても通訳を通してできないと通じないので、その場での説明や突発的な説明が必要な時などに困惑した。
- 時期的にちょうど議会日程等と重なり、他の課との連携がうまくいかなかつたので、時期の見直しが必要なように思う。

加えるとよいと思われる活動

- 訪問県の文化等に触れる機会をもう少し増やせたら、もっと県の良さを理解してもらえるのではないかと感じた。
- 受入れ側の日程の問題もあるが、小学校の訪問又は小学校の行事見学などもできたら内容的にももっと充実したのではないかと思う。

プログラム改善に向けた助言

- 言葉の違いがネックとなり、もっと分かりやすい言い方や、説明の仕方があったように思うがうまく伝えることができず、もう少し改善の余地があるように思った。中国の教職員の方が全員スマホをもっていたようなので、アプリで翻訳機能を入れてもらえたなら、もう少しコミュニケーションが取りやすかったかも知れない。

第2班

●奈良市教育委員会

指導主事 鎌野 慶子

プログラムの全体的な印象

- 3日間の日程を予定通り実施することができ、中国の教職員の皆様には奈良市の教育について、一定の理解を得たと思う。オリエンテーションでは、本市が行っている世界遺産学習の内容や実施学年等について、熱心に中国の先生方が質問されていましたが印象に残った。また、都市部と地方との教育格差をなくそうとする取組（給食の実施や教育費の補助等）について中国の先生が話されていたことも印象に残った。
- 東大寺では、大仏建立の経緯や大切に思う人々の営み、奈良と中国とのつながり等を現地で体感していただくことができたと考えている。

プログラム成果

- 両国の教育について、交流を深めることができたので、相互理解につながったと考える。訪問いただいた3

校については、実際の交流を通して教員や児童生徒の見識が深まったと考えている。また、唐招提寺や東大寺の見学等を通して、奈良の人々が先人から受け継いだものを大切にしていることが伝わったと思う。

苦労した点

- 受入校や見学先との打合せ。

3. 受入れ校

第1班

●麗澤中学・高等学校

教頭 松本 阜三

プログラムの全体的な印象

- 中国の教職員の道徳教育に対する関心が予想以上に高かったことに驚いた。
- また今回は時間と本校行事の都合で、生徒との交流や一般教員との交流が十分に行うことができなかつたが、学校見学において、部活の見学に対して、中国の教職員が強い関心を示していたことが興味深かつた。(特に音楽の教員がいたため、吹奏楽部に対する関心が高かったようである)

プログラム成果

- 予想以上に、熱心な意見交換ができたことにより、本校教員の中国、特に中国の教育事情に対する認識が改まったことが成果であった。
- また中国の教職員に対して、日本の一私学の実情を認識してもらうことができたことは成果であったと考える。

プログラム改善に向けた助言

- 時間の都合で難しいとは思うが、中国の教育事情についてもう少し事前に知ることができたなら、もう少し深い意見交換ができたかもしれないと思う。

●高知県立中村特別支援学校

教頭 杉元 美栄

プログラムの全体的な印象

- 中国の先生方は、とても熱心に授業を参観してくださり、指導の進め方についての質問をたくさんいただいた。中国では、障害の重い子どもたちの教育はもとより、知的障害教育は、これからの中村特別支援学校の教育課題であることを知った。授業の質問では、「ま

- ひや不安定な歩行をしている子どもに、「リトミックは効果があるのか?」、「ヘッドギアとは何か?」、「なぜ先生と子どもが一緒に運動をするのか?」、「なぜ木を磨くのか?」、「頭にカードをぶら下げているのはなぜか(音楽の授業で教員が音階のカードを頭につけて、リズムに合わせて音階カードを手で触っていた)」など私たちが日頃、当たり前のように指導していることを改めて質問され、私たちも指導の意味を考える機会となった。
- また、交流会では本校の教育について、「命を大事にしている教育」とか、「愛にあふれた学校」という表現でお褒めの言葉もいただき、本校の取組を紹介できたことを嬉しく思った。

プログラム成果

- 障害の重い子どもたちの教育内容や指導の在り方について知つていただけた。
- 子どもたちが自ら中国の人と挨拶を交わし、触れ合う機会がもてた。

苦労した点

- 学校主導で訪問の準備を進めましたが、初めてのことだったので、配慮すべきことが十分に分かっていない面があった。
- 交流会の内容や時間配分、会の進行については不手際もあったと思う。ACCUが意図していた内容になっていたのか心配だった。今後のためにも、本校の対応についてご意見をいただけたらと思う。

加えるとよいと思われる活動

- 子どもたちと一緒に活動する(例えば、歌やダンスを踊る、作品づくり、調理活動など)と、より子どもの障害の理解や教員の指導の意図が伝わるよう思う。

プログラム改善に向けた助言

- 通訳を3名つけてくださいり、小グループ

で授業見学ができた。いつもと違う状況には、とても弱い子どもたちだが、子どもたちも落ち着いて授業に取り組むことができた。

●高知県立幡多農業高等学校

教諭 德橋 佑哉

プログラムの全体的な印象

- 本校生徒たちは、中国教職員の方々が授業見学時に見せた心配りに感謝し、中国に対する認識が今まで以上に向上したようだった。例えば、施設見学時に園芸システム科のシクラメン栽培について説明したが、日本では、中心にきれいな花がまとまるよう葉組(葉は外側に、花は中心へ)をおこなうが、中国では、葉と花が混ざった状態で売られているのを良く目にするということだった。その会話から、シクラメンの栽培一つでも、両国間の美德の違いを感じることができた。

プログラム成果

- 成果は、受入れの対応を、生徒会を中心に運営したことと、質疑応答を通して本校生徒の中国に対する認識が今まで以上に向上したことである。また、高校生の時期に、中国教職員と出会えたことは、今後、彼らの人生に大きな影響を与えたと確信している。

苦労した点

- 本校は、海外の先生方を大勢受け入れたことがなく、一からの企画・運営となつたため、充実したプログラムが実施できるのか不安であった。また、農場見学を2班に分けたため、教職員の負担が少し多かったように思う。記念品を何にするべきか決定に苦労した。質疑応答に関して、事前に質問事項がわかつていれば、スムーズな回答ができたように思う。

加えるとよいと思われる活動

- 今後、教員交流プログラムを実施した日中双方の教職員を招集し、体験してきたことを踏まえ、両国の教育的課題を解決する討論会があれば、振り返りもでき、さらに充実したプログラムとなるように思う。

プログラム改善に向けた助言

- 日本教職員も1班だけでなく、2班中国に派遣できれば、より多くの教職員が中国との文化的交流を通して得られた国際理解教育を実践するなど、生徒に還元する機会が増えるように思う。

●高知県立中村中学校・高等学校

教頭 田邊 法人

プログラムの全体的な印象

- 訪問された先生方の活動的な様子。
- 訪問された先生方の教育に対する真摯なところ。
- 部活動時間～帰宅時間の長時間化の指摘。
- 最初の挨拶における、国家間の友好に関する言及。

プログラム成果

- 先生方の真摯さに、教員の情熱が大切であることを再認識できた。
- 事前準備を通して、本校の教育活動を振り返ることができた。

苦労した点

- 細かな時間設定や校内見学等、まかせられる部分が多く、多少苦労した。
- 中国側が校内見学にどのような要望(施設見学より授業参観重視であるなど)があるのかを知っておけば、より希望に応えられたと思う。

加えるとよいと思われる活動

- 生徒との質疑や、交流。

プログラム改善に向けた助言

- 滞在時間がもっと長ければ、上記4のような生徒との質疑・交流が可能

かもしれません。

第2班

●神田女学園中学校・高等学校

国際交流部部長 今村 友香

プログラムの全体的な印象

- 校内見学をした際に、中国の先生方がリサイクルボックスや掲示物など、細かい点まで興味を持ってご覧になっていた姿が印象に残った。
- また、教員との交流会では、文部科学省が定めている教育方針と照らし合わせて、本校ではどのような取り組みを行っているか、という質問が多かったので、日本の教育システム全体を知りたいのだと思った。

プログラム成果

- 生徒と中国の先生方の交流会が挙げられます。本校の授業で中国語を履修している高校生が参加しましたが、最初は生徒たちがシャイでなかなか話しかけられなかった。通訳の方や、中国語が上手な生徒たちのおかげで、他の生徒たちも会話の輪に入れられるようになったと思う。
- 中国からの先生方は熱心に質問をしてくださいり、交流の最後にはたくさん笑顔が見られました。生徒たちは、中国語の教員以外と実際に中国語を使う体験をし、今後の中国語の勉強への励みになったようだ。

苦労した点

- 教員との交流の時間、事前にうかがっていたような質問(IT、クラブ活動など)とは違うタイプの質問が多かったので、少し戸惑った。(本校の取り組み、というより文部科学省の教育方針の解釈、など)

●奈良市立飛鳥小学校

教務主任 大西浩明

プログラムの全体的な印象

- 実際に子どもたちと直接触れ合つてもらえたことが一番よかった。

年生への授業や全校歓迎会で、中国の先生方がいろいろなことに関心をもって本プログラムに参加されていることがよく伝わってきて、受け入れているこちらの方も嬉しくなった。質疑の中で、校長の権限や学校の危機管理対策として全職員が笛を携帯していることに興味を持たれたことが印象に残った。

プログラム成果

- 本校の子どもたちが自分たちの学習成果を発信できる場となり、これまでの学習を振り返ることにもなった。また、実際に6年生に直接中国のことを授業の中で話してくださったおかげで、外国について興味を強くもった子どもが増えたようだ。

苦労した点

- 特に苦労したことはありませんでしたが、授業見学の時間に中国にはない教室に関心を持たれたようで、いろいろ案内をさせていただいた。事前に参加者の興味や関心が分かっていれば、もっとスムーズにできたのかなと感じる。

加えるとよいと思われる活動

- 教員交流の時間があれば大変有意義かと思います。午後からの交流になれば、子どもを下校させてから教員も参加できると思う。

●奈良市立一条高等学校 教頭 成松 亨

プログラムの全体的な印象

- 中国教職員の方々の積極的な姿勢がとても印象に残った。教員のランク付けがあるのか、男女の定年は同じなのか、といった質問や教員の質などについての鋭い質問もあり、とても印象的だった。
- 通訳にして同行いただいた方の通訳としてのレベルの高さに驚いた。

プログラム成果

- 中国教職員の方から、中国の高等学校や高校生事情を生徒が聞く機会をもてたことから、同世代の異国の生活について生徒がより深く知ることができたこと。

苦労した点

- 海外の教職員向けに学校紹介をするため、どの程度の情報を盛り込むべきか、悩んだ。また、通訳者の負担を考慮すると、アドリブで説明を追加することができず、時間配分に苦慮しました。(実際は通訳の方のレベルが非常に高く、問題はなかった。)

加えるとよいと思われる活動

- 時期的な問題もあるが、文化祭や体育祭など学校行事的なものも見ていただけたとよかったです。また、せっかく教職員に来ていただいているので、ぜひ授業をしていただいたり、児童生徒と同じ空間で一緒に行動していただいたりする活動は、訪問校任せではなく、必須であると感じた。

●奈良市立富雄第三小中学校

校長 石原 伸浩

プログラムの全体的な印象

- 6年生3学級に分かれ、授業をしていただいた。それぞれ、中国での学校生活を、教育の中身や子どもの様子の写真をふんだんに使って話していただき、大変子どもたちは興味を持って聞いていた。クラスによつては質問コーナーを設け、自分たちの生活と中国の生活を比べ、「流行やアニメなど、あまり違わないんだ。」という思いも持つたようだ。
- 一方、日本の小学校は9教科なのに、「中国は40教科以上ある。」と知り、びっくりしていて、異文化理解のいい機会となった。
- 教員との交流については3グルー

ブに分かれ、それぞれに本校の教員 3~4 名が入って活発な意見交換ができるように思う。

- 施設見学では、中国の先生方の「見る視点」が我々と違い、学校文化の違いを感じた。たとえば、理科室の黒板に「化学」の内容と「電気」の内容が残されていたのを見て、「中国では『化学』と『電気』は別の教科なのに日本は『理科』という一つの教科なのか。」と驚いておられた。
- また、廊下掲示で「掃除の仕方」などの生徒のポスターは中国ではないようで、しきりに写真を撮っておられた。そういういたちよつとしたところで学校生活の違いを感じておられたようだ。

プログラム成果

- 教員も子どもも「異文化に触れる」「異文化を知る」ということに意味があるようと思う。「自分が住んでいる世界しか知らない。」「自分が行っている教育しか見えない。」というのでは世界が広がらない。全然違う文化圏の学校、人と触れることで「そんな考え方・やり方があったんだ。」「自分たちがしていることが当たり前じゃないんだ。」と知ることで逆に自分たちの生活や教育を見直すことにもなった。
- また逆に、違うと思っていたけど、「僕たちも中国の子も同じじやん。」と感じる部分もあった。違いと共通していること、それぞれを知ることができたことが一番大きな成果だと思う。

苦労した点

- 「言葉の壁」が良くも悪くも課題であった。「言葉の壁があっても交流はできる。」という点では良い経験となったが、言葉の壁があることで、コミュニケーションをとるのに 2 倍の時間(通訳を通して意思の疎通を図るために)かかる。限られた短い時間の中で密度の濃い交流をしようと思うと、どうしても倍の時間

がかかるてしまうこともどかしい。場面によっては、同時通訳の形で進むことができれば、もっと時間を有効に使えるのだが・・・。

- 教員との交流はとても良い取り組みであるが、小学校では、授業中はほとんどの先生が教室に行っていいるため、小学校教員が交流することは難しいように思う。本校は小中一貫校のため、教員交流は中学校教員が主体で参加できたが…。

加えるとよいと思われる活動

- 学校側とすれば、今回のように子どもも教員も交流できる形が嬉しいが、訪問する側の目的・意図もあるので、その調整の中で考えてくださいればいいのでは。
- あと 1 時間でもゆっくりとできればと思う。

プログラム改善に向けた助言

- 学校に対して記念品を持ってきてくださった教員もおられたが、それが競争になっていくと参加される先生方が大変だなと思った。
- しかし、子どもの作品(絵画・習字)を記念品としていただいたので、交流の時の様子やエピソードとともに、いただいた記念品を全校の子どもに披露し、職員室前に展示した。このことにより、当日は直接交流できなかった子どもたちも、間接的には中国教職員と交流でき、大変良かった。
- 一部の先生が、特定の子どもにプレゼントを渡していた。好意でしてくださったことであろうが、学校全体・学級全体でお迎えをしているので、個人的に渡すことは控えるよう事前に説明しておいてほしかった。

付録

1. 実施要項
2. プログラム日程
3. 参加者リスト
4. 関係機関リスト
5. 文部科学省講義資料
6. 過去のプログラム実績

◆付録 1. 実施要項

国際連合大学 2016-2017年国際教育交流事業 中国教職員招へいプログラム

第1班：2016年11月7日(月)～13日(日)：東京、高知県
第2班：2016年11月28日(月)～12月4日(日)：東京、奈良県奈良市

実 施 要 項

1. 背 景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、国際連合大学の委託を受け、我が国と中国の教職員間の交流を深め、両国民の相互理解と友好の促進に資するため、国際教育交流事業として2002年より中国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施しております。さらに、2003年からは日本国内で訪問した自治体や学校が中国とのさらなる交流を深めることを目的として日本の初等中等教育教職員が中国を訪問するプログラムを実施してきました。2016年1月までに中国から招へいした教職員数は延べ1,588名にのぼり、日本から訪中した324名と合わせ、日中間の相互理解促進、学校間交流に大きく貢献してきました。

本年度も文部科学省、中国教育部、高知県教育委員会および奈良市教育委員会の協力のもと、中国から初等中等教育教職員約40名を2班に分け、第1班：2016年11月7日(月)から11月13日(日)、第2班：2016年11月28日(月)から12月4日(日)までのそれぞれ7日間にわたり、本邦に招へいします。

2. 目 的

- (1) 日本の教育制度および地域の学校教育の現状を中国教職員に紹介すること
- (2) 学校等での日中教育関係者の意見交換を通じて、両国の教育の質を高めること
- (3) 日中教職員間のネットワーク構築・強化に寄与すること
- (4) 中国教職員が日本の文化全般に対する理解を深めること
- (5) 日中両国の相互理解と友好を促進すること

3. 日 程

本プログラムは東京、高知県（第1班）、奈良市（第2班）に於いて、下記の日程で各班20名で実施されます。

第1班：20名（上海帰着）

日付	日程	訪問先	活動
11月7日(月)	第1日	東京および東京近郊	日本到着 オリエンテーション、開会式・歓迎交流会
11月8日(火)	第2日	東京および東京近郊	文部科学省講義 学校訪問（授業見学、教員、児童生徒との交流）
11月9日(水) 11月10日(金)	第3-5日 (3日間)	高知県	東京から訪問先へ移動 教育長表敬・訪問地教育事情概要説明、 学校訪問（授業見学、教員、児童生徒との交流） 教育文化施設・史跡視察
11月12日(土)	第6日	高知県、東京	東京へ移動
11月13日(日)	第7日	東京、上海	日本出発

第2班：20名（北京帰着）

日付	日程	訪問先	活動
11月28日(月)	第1日	東京および東京近郊	日本到着 オリエンテーション、開会式・歓迎交流会
11月29日(火)	第2日	東京および東京近郊	文部科学省講義 学校訪問（授業見学、教員、児童生徒との交流）
11月30日(水) 12月1日(金)	第3-5日 (3日間)	奈良市	東京から訪問先へ移動 教育長表敬・訪問地教育事情概要説明、 学校訪問（授業見学、教員、児童生徒との交流） 教育文化施設・史跡視察
12月3日(土)	第6日	奈良市近郊	奈良市近郊視察
12月4日(日)	第7日	大阪、北京	日本出発

4. 参加者数

- 第1班：20名
第2班：20名、合計40名

5. 参加資格

- (1) 中華人民共和国の国民であること。
- (2) 所属する学校等からの推薦を受けた初等中等教育の教職員または教育行政官であること。
- (3) 日本への関心が高く、日本の教職員との主に教育分野における交流に高い関心を持つもの。
- (4) 中国語（普通話）での会話が可能であること。
- (5) プログラムの全日程に参加が可能であること。

※なお、参加者は、①45歳以下で教職員経験3年以上のもの、②日本の教職員、児童生徒、学校との交流を希望しているもの、③日本語もしくは英語の会話能力があるものが望ましい。

6. 評価と報告

日本滞在中（第6日）

- (1) 各参加者はACCUの用意する評価票に記入し、第1班：11月12日（土）、第2班：12月3日（土）にACCUに提出する。

帰国後

- (2) 各グループの代表者は報告書を作成し、中国教育部に提出する。中国教育部は各報告書を、第1班：12月14日（水）、第2班：1月5日（木）までにACCUに送付する。（Microsoft Word 4～5枚程度）

7. 渡航費等

ACCUは下記の経費を負担する。

(1) 往復航空運賃

往路：北京～東京（第1班・第2班）、
復路：東京～上海（第1班）、大阪～北京（第2班）間のエコノミークラス航空券。

(2) 宿泊と食事

プログラム期間中の宿泊（朝食含）、およびプログラム期間中の食事。食事が提供されない場合については食費の規定額。

(3) 日本国内の移動旅費

プログラム期間中の、自由行動時間以外の国内移動旅費。

※上記以外の経費については参加者が負担することとする。

8. 海外旅行傷害保険

各参加者は、プログラム期間中に起きたりうる傷害、疾病等の緊急時に備えて、各自の責任において、必ず海外旅行傷害保険に加入すること。

9. 通訳

公式プログラム期間中は日本語と中国語（普通話）間の逐次通訳が行われる。

10. 申請・推薦手続

中国教育部は、参加者を選定し、プログラム開始約2ヶ月前【第1班：9月6日（火）、第2班：9月27日（火）】までに①参加者リスト、②参加者のデータシート、および③パスポートコピーを揃えて、ACCUへ推薦することとする。データシートの用紙はACCUより送付する。

11. このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU) 人物交流部

〒162-8484 東京都新宿区袋町6番地 日本出版会館

Tel: 03-3269-4498 Fax: 03-3269-4510 E-mail: accu-exchange_ml@accu.or.jp

◆付録 2. プログラム日程

(1) 第 1 班プログラム

第 1 日(日本到着日)		11月 7 日(月) 服装:オリエンテーションまでカジュアル、 歓迎交流会はビジネス
東京	08:30-12:45	北京首都国際空港発(NH964 便)、羽田(東京)空港着
	13:30-14:30	昼食 (羽田空港内 ロイヤルパークホテル ザ 羽田 TAIL WIND)
	15:00	ホテル着、チェックイン (ニューオータニイン東京)
	16:30-17:30	オリエンテーション (ニューオータニイン東京 3階「おおとり西」)
	18:00-20:00	開会式・歓迎交流会 (ニューオータニイン東京 3階「おおとり東」)
		宿泊先:ニューオータニイン東京
第 2 日		11月 8 日(火) 服装:ビジネス
東京	08:45	ホテル発
	09:30-11:00	文部科学省表敬訪問、講義「日本の初等中等教育について(仮)」
	12:35	麗澤大学到着
	12:45-13:45	昼食 (学内レストラン)
	14:00-16:00	麗澤中学校・高等学校訪問
	17:30	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:ニューオータニイン東京
第 3 日		11月 9 日(水) 服装:ビジネス
東京→高知県	08:00	チェックアウト、ホテル発
	08:30	羽田(東京)空港着
	09:40-11:05	羽田(東京)空港発(JL493 便)、高知空港着
	12:15-13:15	昼食 (オリエントホテル高知)
	13:30-14:30	高知城見学(一斉入場後、各自見学)
	15:00-17:00	高知県教育委員会表敬訪問 (高知県庁西庁舎 2階「教育委員室」)
	17:00-20:00	四万十市へ移動 (バス)、途中「道の駅あぐり窪川」で休憩
	20:00	ホテル着、チェックイン (新ロイヤルホテル四万十)
	20:00-21:00	ホテルロビーに再集合、夕食 (新ロイヤルホテル四万十 10階「アステリア」)
		宿泊先:新ロイヤルホテル四万十
第 4 日		11月 10 日(木) 服装:ビジネス
高知県	10:00	ホテル発
	10:30	三里着
	11:15-12:15	屋形船で四万十川遊覧 (船内にて昼食)
	12:30-13:00	移動(バス)
	13:00-17:00	高知県立中村特別支援学校訪問
	17:30	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:新ロイヤルホテル四万十

第5日		11月11日(金) 服装:ビジネス
高知県	08:30 08:50 09:00-11:30 11:45-12:45 13:00-15:00 15:00-18:00 18:00 18:30 18:40-18:50 19:00-21:00 21:00-21:30	ホテル発 学校着 高知県立幡多農業高等学校訪問 昼食（サンリバー四万十「いちもん家」） 高知県立中村中学校・高等学校(中高一貫校)訪問 高知市へ移動（バス） ホテル着、チェックイン（ブライトパークホテル） ホテルロビーに再集合 ブライトパークホテルから高知共済会館に移動（バス） 歓送迎会（高知共済会館「桜」） タクシーに分乗してホテルに移動、ホテル着
		宿泊先:ブライトパークホテル
第6日		11月12日(土) 服装:カジュアル
高知県→東京	08:30 09:10 10:20-11:35 12:00-12:15 12:15-13:15 13:15	チェックアウト、ホテル発 高知空港着 高知空港発(NH564便)、羽田(東京)空港着 ホテルへ移動（ホテルのバスを利用） 昼食（ホテル JAL シティ羽田東京 レストラン「HARUHORO」） ホテルフロントに荷物を預けて解散 ※チェックインは 14:00 以降、各自で行う。フロントにてパスポート提示。 東京近郊自由研修、夕食(各自) 宿泊先:ホテルJALシティ羽田東京
第7日(日本出国日)		11月13日(日) 服装:カジュアル
東京 上海	08:00 08:10 10:00-12:25	チェックアウト、ホテル発（ホテルのバスを利用） 羽田空港着 羽田(東京)発(NH969便)、上海虹桥空港着

(2) 第2班プログラム

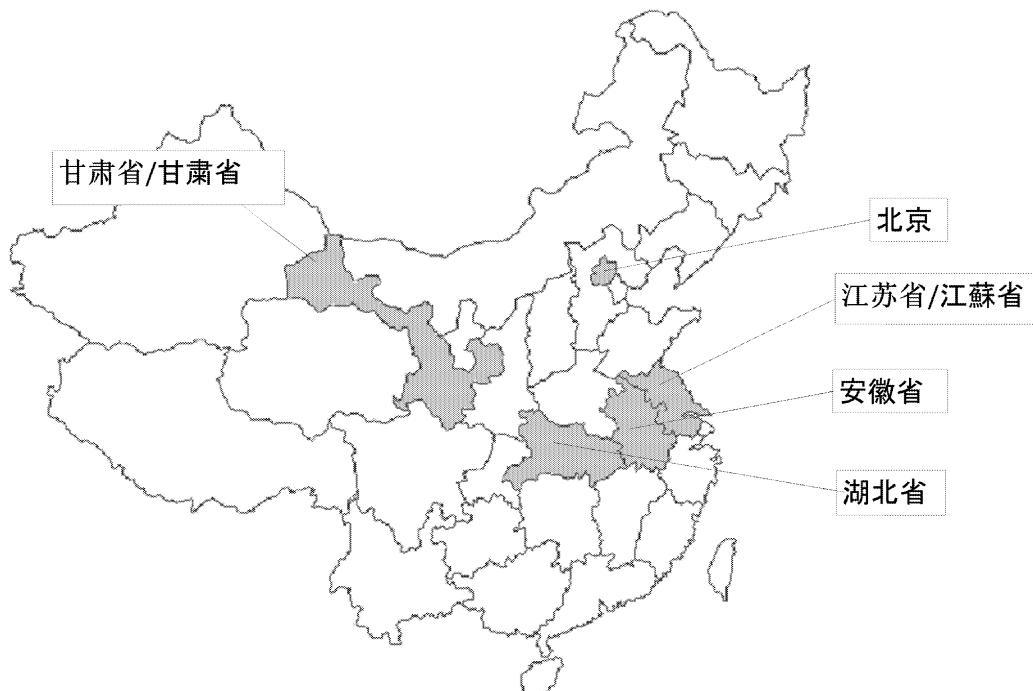
第1日(日本到着日)		11月28日(月) 服装:オリエンテーションまでカジュアル、 歓迎交流会はビジネス
東京	08:30-12:45 13:30-14:30 15:00 16:30-17:30 18:00-20:00	北京首都国際空港発(NH964便)、羽田(東京)空港着 昼食 (羽田空港内 ロイヤルパークホテル ザ 羽田 TAIL WIND) ホテル着、チェックイン (ニューオータニイン東京) オリエンテーション (ニューオータニイン東京 3階「おおとり西」) 開会式・歓迎交流会 (ニューオータニイン東京 3階「おおとり東」) 宿泊先:ニューオータニイン東京
第2日		11月29日(火) 服装:ビジネス
東京	08:45 09:30-11:00 11:30-12:30 13:00-17:00 17:30	ホテル発 文部科学省表敬訪問、講義「日本の初等中等教育について(仮)」 昼食 (土風炉銀座一丁目店) 神田文学園中学校・高等学校訪問 ホテル着、夕食(各自) 宿泊先:ニューオータニイン東京
第3日		11月30日(水) 服装:ビジネス
東京→奈良市	07:15 08:00 09:00-10:10 10:30-11:45 11:45-12:45 13:00-14:30 15:00-16:00 16:30-17:00 17:40-17:50 18:00-20:00 20:00-20:30	チェックアウト、ホテル発 羽田(東京)空港着 羽田(東京)空港発(NH17便)、伊丹空港着 伊丹空港～奈良市へ移動 (貸切バス) 昼食 (ホテルアジール奈良アネックス) 奈良市教育委員会表敬訪問 (奈良市役所 北棟 6階「22会議室」) 唐招提寺見学 ホテル着、チェックイン ホテルロビー集合、歓迎交流会会場へ移動 (ホテルアジール・奈良の送迎バス利用) 歓迎交流会 (ホテルアジール・奈良) AB ホテル奈良へ移動 (ホテルアジール・奈良の送迎バス利用) 宿泊先:AB ホテル奈良
第4日		12月1日(木) 服装:ビジネス
奈良市	08:40 09:00-12:15 12:30-13:30 14:00-17:00 17:30	ホテル発 奈良市立飛鳥小学校訪問 昼食 (なら和み館) 奈良市立一条高等学校訪問 ホテル着、夕食(各自) 宿泊先:AB ホテル奈良

第5日		12月2日(金) 服装:ビジネス
奈良市	08:50 09:20-13:25 14:00-17:00 17:15	ホテル発 奈良市立富雄第三小中学校訪問(小中一貫校、給食体験含む) 奈良国立博物館・世界遺産「東大寺」大仏殿見学 ホテル着、夕食(各自) 宿泊先:AB ホテル奈良
第6日		12月3日(土) 服装:カジュアル
奈良市周辺	08:30 10:00-11:30 12:00-13:00 13:00-16:00 17:30	ホテル発 漢字ミュージアム見学 昼食(梅山堂) 世界遺産「清水寺」見学 ホテル着、夕食(各自) 宿泊先:AB ホテル奈良
第7日(日本出国日)		12月4日(日) 服装:カジュアル
奈良→大阪	06:15-06:35 06:40 08:10	ホテルにて朝食 チェックアウト、ホテル発 関西空港着
北京	10:00-12:30	関西空港発(NH979便)、北京空港着

◆付録3. 参加者リスト

(1) 第1班 20名 ★1:団長 丁育紅(DING Yuhong)
○2:秘書長 童蘇陽(TONG Suyang)

No.	姓名			所在単位 / 所属機関		职务 / 職務	
	中文	日文	拼音 / ローマ字表記	性別	中文	日文	中文
★A-1	丁育紅	丁育紅	DING Yuhong	女	安徽省教育厅	安徽省教育厅	处长
○A-2	童蘇陽	童蘇陽	TONG Suyang	男	教育部国际司	教育部国際局	项目官员
A-3	楊兆永	楊兆永	YANG Zhaoyong	男	淮南市第一中学	淮南市第一中学	高级教师
A-4	常艳	常 艳	CHANG Yan	女	淮南市第二中学	淮南市第二中学	高级教师
A-5	余 洋	余 洋	YU Yang	男	淮南实验中学	淮南実験中学	高级教师
A-6	樊福锐	樊福锐	FAN Furui	男	安徽省淮南师范附属小学	安徽省淮南師範付属小学	副主任
A-7	王洪军	王洪軍	WANG Hongjun	男	安徽淮南洞山中学小学部	安徽淮南洞山中学小学部	副校长
A-8	胡红兵	胡紅兵	HU Hongbing	男	安徽省黄山市屯溪一中	安徽省黄山市屯溪一中	政教处主任（中学高级）
A-9	许 莉	許 莉	XU Li	女	安徽省黄山市田家炳实验中学	安徽省黄山市田家炳実験中学	副校长（中学高级）
A-10	盛燕莉	盛燕莉	SHENG Yanli	女	安徽省黄山市屯溪第四中学	安徽省黄山市屯溪第四中学	校长（中学高级）
A-11	卢进元	盧进元	LU Jinyuan	男	湖北省教育厅	湖北省教育厅	调研员
A-12	肖敦洪	肖敦洪	XIAO Dunhong	男	湖北省仙桃中学	湖北省仙桃中学	副校长
A-13	朱厚祥	朱厚祥	ZHU Houxiang	男	湖北省仙桃中学	湖北省仙桃中学	教师
A-14	向一丁	向一丁	XIANG Yidong	女	湖北省利川市第一中学	湖北省利川市第一中学	副校长
A-15	张 英	張 英	ZHANG Ying	女	湖北省利川市第一中学	湖北省利川市第一中学	国际部副主任
A-16	廖 建	廖 建	LIAO Jian	男	湖北省水果湖第二中学	湖北省水果湖第二中学	总务主任
A-17	何红清	何紅清	HE Hongqing	男	湖北省水果湖第二中学	湖北省水果湖第二中学	教师
A-18	杜应海	杜応海	DU YingHai	男	湖北省宜都市杨守敬中学	湖北省宜都市楊守敬中学	副校长
A-19	李红军	李紅軍	LI Hongjun	女	湖北省宜都市杨守敬小学	湖北省宜都市楊守敬小学	校长
A-20	金峰	金 峰	JIN Feng	男	甘肃省敦煌市七里镇中学	甘肃省敦煌市七里町中学	校长



(2) 第2班 20名

★1:團長 王雲 (WANG Yun)
 ○2:秘書長 張月盈 (ZHANG Yueying)

No.	姓名			性別	所在單位 / 所屬機關		職務 / 職務	
	中文	日文	拼音 / ローマ字表記		中文	日文	中文	日文
★B-1	王 云	王 雲	WANG Yun	男	山西省教育厅	山西省教育廳	副厅长	副庁長
OB-2	张月盈	張月盈	ZHANG Yueying	女	教育部国际司	教育部國際局	项目官员	項目官員
B-3	刘 波	劉 波	LIU Bo	男	山西省实验中学	山西省實驗中學	校长助理	校長助理
B-4	张毅强	張毅強	ZHANG Yiqiang	男	太原市第五中学校	太原市第五中學校	政教副主任	政教副主任
B-5	梁美红	梁美紅	LIANG Meihong	女	太原市成成中学校	太原市成成中學校	工会主席	労働組合主席
B-6	尚兰英	尚蘭英	SHANG Lanying	女	太原市外国语学校	太原市外国语學校	教师	教師
B-7	孙玉花	孫玉花	SUN Yuhua	女	太原市迎泽区滨河小学校	太原市迎澤區濱河小學校	副校长	副校長
B-8	乔 娅	喬 娅	QIAO Yan	女	太原市第四实验小学校	太原市第四實驗小學校	总务主任	総務主任
B-9	马伟兰	馬偉蘭	MA Weilan	女	山西大学附属子弟小学	山西大學附屬子弟小學	校长	校長
B-10	王更生	王更生	WANG Gengsheng	男	太原市第四十八中学校	太原市第四十八中學校	校长	校長
B-11	刘君娜	劉君娜	LIU Junna	女	北京国际职业教育学校	北京國際職業教育學校	教师	教師
B-12	范怀宇	範懷宇	FAN Huaiyu	女	北京市第十一中学	北京市第十一中學	德育副主任	道德副主任
B-13	金晓燕	金曉燕	JIN Xiaoyan	女	北京市第二十二中学	北京市第二十二中學	教育主任	教育主任
B-14	宋燕晖	宋燕暉	SONG Yanhui	女	北京市东城区灯市口小学	北京市東城區燈市口小學	教学副校长	教學副校長
B-15	郭文焕	郭文煥	GUO Wenhuan	女	北京光明小学	北京光明小學	主任	主任
B-16	庞雪梅	龐雪梅	PANG Xuemei	女	北京市东城区回民实验小学	北京市東城區回民實驗小學	副校长	副校長
B-17	马 健	馬 健	MA Jian	女	北京市东城区回民小学	北京市東城區回民小學	副校长	副校長
B-18	高泳锦	高泳錦	GAO Yongjin	女	北京市龙潭中学	北京市龍潭中學	德育主任	道德主任
B-19	孟宏宇	孟宏宇	MENG Hongyu	男	北京市第五中学	北京市第五中學	教师	教師
B-20	付 虎	付 虎	FU Hu	男	甘肃省敦煌市教育局	甘肃省敦煌市教育局	局长	局長



◆付録 4. 関係機関リスト

1. 全体プログラム

国際連合大学 (UNU)

〒150-8925 東京都渋谷区神宮前 5-53-70

TEL: 03-5467-1212

URL: <http://jp.unu.edu/>

文部科学省 (MEXT)

大臣官房国際課

〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関 3-2-2

TEL: 03-5253-4111

URL: <http://www.mext.go.jp>

外務省 (MOFA)

大臣官房国際文化協力室

〒100-8919 東京都千代田区霞ヶ関 2-2-1

TEL: 03-5501-8000

URL: <http://www.mofa.go.jp/mofaj/>

在中国日本国大使館

〒100-600 中国北京市朝陽区亮馬橋東街 1 号

TEL: +86-10-8531-9800

URL: http://www.cn.emb-japan.go.jp/index_j.htm

中華人民共和国教育部

国際協力交流局アジア・アフリカ課

〒100-816 中国北京市西单大木仓胡同 37 号

TEL: +86-10-6609-6650

URL: <http://www.moe.edu.cn/>

中華人民共和国駐日本国大使館教育処

〒135-0023 東京都江東区平野 2-2-9

TEL: 03-3643-0305

URL: <http://www.china-embassy.or.jp/jpn/>

2. 地域受入れプログラム受入自治体

第1班 高知県教育委員会

教育長：田村 壮児

担当者：教育政策課 主任管理主事 今西 一成

〒780-8570 高知県高知市丸ノ内一丁目 7番 52号

TEL: 088-821-4568 FAX: 088-821-4558

URL: <http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310000/>

第2班 奈良市教育委員会

教育長：中室 雄俊

担当者：学校教育課 指導主事 鎌野 慶子

〒630-8580 奈良市二条大路南一丁目 1番 1号

TEL: 0742-34-1111 FAX: 0742-36-3552

URL: <http://www.city.nara.lg.jp/www/contents/1398842267188/>

3. 実施団体

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 日本出版会館

TEL: 03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510

Email: accu-exchange_ml@accu.or.jp

URL: <http://www.accu.or.jp>

田村 哲夫

理事長

木曾 功

理事

堀江 振一郎

理事・事務局長

進藤 由美

人物交流部 部長

有蘭 佳子

人物交流部 事務専門員

高松 彩乃

人物交流部 事務専門員

河口 枝里子

人物交流部 事務専門員

唐 詩

プロジェクトスタッフ

(所属・肩書はプログラム実施時のもの)

◆付録5. 文部科学省講義資料

<p style="text-align: center;">日本の初等中等教育の概要</p> <p style="text-align: center;">文部科学省 初等中等教育局 北野 允 平成28年11月8日</p> <p style="text-align: center;">文部科学省</p>	<p style="text-align: center;">講演の構成</p> <p>I. 日本の初等中等教育制度……………3 II. 日本の教育政策の一部の紹介…………14</p>																																
<p style="text-align: center;">I. 日本の基本的な初等中等教育制度</p>																																	
<p style="text-align: center;">学校体系</p>																																	
<p style="text-align: center;">学校数、生徒、教員数</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th></th> <th>学校数</th> <th>生徒数</th> <th>教員数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>幼稚園</td> <td>11,700</td> <td>140万人</td> <td>10万人</td> </tr> <tr> <td>小学校</td> <td>6年</td> <td>20,600</td> <td>654万人</td> <td>42万人</td> </tr> <tr> <td>中学校</td> <td>3年</td> <td>10,400</td> <td>347万人</td> <td>25万人</td> </tr> <tr> <td>高等学校</td> <td>3年</td> <td>5,000</td> <td>330万人</td> <td>24万人</td> </tr> <tr> <td>中等教育学校</td> <td>6年</td> <td>50</td> <td>3万人</td> <td>2,500</td> </tr> <tr> <td>特別支援学校</td> <td>1,100</td> <td>14万人</td> <td>8万人</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: center;">出典:平成27年度 学校基本調査</p>			学校数	生徒数	教員数	幼稚園	11,700	140万人	10万人	小学校	6年	20,600	654万人	42万人	中学校	3年	10,400	347万人	25万人	高等学校	3年	5,000	330万人	24万人	中等教育学校	6年	50	3万人	2,500	特別支援学校	1,100	14万人	8万人
	学校数	生徒数	教員数																														
幼稚園	11,700	140万人	10万人																														
小学校	6年	20,600	654万人	42万人																													
中学校	3年	10,400	347万人	25万人																													
高等学校	3年	5,000	330万人	24万人																													
中等教育学校	6年	50	3万人	2,500																													
特別支援学校	1,100	14万人	8万人																														
<p style="text-align: center;">在籍者数、就園率・就学率の経年変化</p>																																	

<h3>義務教育制度の概要</h3> <p>憲法</p> <p>第26条 <i>すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。</i></p> <p>すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。</p> <p>教育基本法</p> <p>第5条 国民は、その保護する子に、別に法律で定めるところにより、普通教育を受けさせる義務を負う。</p> <p>2 義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。</p> <p>3 国及び地方公共団体は、義務教育の機会を保障し、その水準を確保するため、適切な役割分担及び相互の協力の下、その実施に責任を負う。</p> <p>4 国又は地方公共団体の設置する学校における義務教育については、授業料を徴収しない。</p>	<h3>義務教育費国庫負担制度の概要</h3> <ul style="list-style-type: none"> ●憲法の要請に基づき、義務教育の根幹(機会均等、水準確保、無償制)を国が責任をもって支える制度。 ●市町村が小中学校を設置・運営。 ●都道府県が教職員を任命し、給与を負担。 ●国は教職員給与費の1/3を負担。 <p>公立義務教育費学校の教職員の給与費(総額約4.5兆円) (国:1.5兆円、小学校41.4万人、中学校24.3万人、特別支援学級4.3万人)</p> <p>国庫負担 約1.5兆円 (予算27年度実績)</p> <p>都道府県</p> <p>〔2/3〕 〔1/3〕</p> <p>〔給与負担〕</p>
<h3>教科書無償給与制度</h3>	<h3>教員養成・免許制度の概要</h3> <p>【免許状主義】</p> <p>教員は、教育職員免許法により授与される各相当の免許状を有する者でなければならない。</p> <p>【教員養成・採用・研修等の各段階を通じた教員の資質向上】</p> <p>養成</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大学における養成が原則 ● 教職課程の認定を受けた学科等において、教科に関する科目、教職に関する科目などを修得することにより、採用当初から学識や教養を担任し、教科指導、生徒指導等を実践するため必要な基礎的な資質能力を養成 <p>採用</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 都道府県・指定都教育委員会等における選拔・採用試験結果を基準 ● 国・教員研修センターにおける研修 ● 各地域において中心的な役割を担う教員に対する研修 <p>研修</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 地方教育委員会等における研修 ● 授業監査研修、授業経験者研修、等 ● 国・教員研修センターにおける研修 ● 各地域において中心的な役割を担う教員に対する研修 <p>適切な人事管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 教員が定期的に最新の知識技能を身につけること ● 教員が自己と評価を持って教壇に立ち、社会の尊厳と信頼を得ることが目的 ● 教員評価システム ● 優秀教員表彰 <p>免許更新制</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 教員が定期的に最新の知識技能を身につけること ● 教員が自己と評価を持って教壇に立ち、社会の尊厳と信頼を得ることが目的 ● 免許令10年の有効期間を定める
<h3>教育行政制度の概要(国・都道府県・市町村の役割)</h3>	<h3>学習指導要領とは</h3> <p>全国のどの地域で教育を受けても、一定の水準の教育を受けられるようにするため、文部科学省では、学校教育法等に基づき、各学校で教育課程(カリキュラム)を編成する際の基準を定めています。これを「学習指導要領」といいます。</p> <p>「学習指導要領」では、小学校、中学校、高等学校等ごとに、それぞれの教科等の目標や大まかな教育内容を定めています。また、これとは別に、学校教育法施行規則で、例えは小・中学校の教科等の年間の標準授業時数等が定められています。各学校では、この「学習指導要領」や年間の標準授業時数等を踏まえ、地域や学校の実態に応じて、教育課程(カリキュラム)を編成しています。</p> <p>確かな学力</p> <p>基礎知識と確実に身に付く、自己表現力、自分たちの意見を述べ、自分の意見を尊重する、よく聞く、よく話す、よく読む、よく書く能力</p> <p>生きる力</p> <p>自ら活動し、他人と共に協働し、他人を助けるやうに行動する心</p> <p>豊かな心</p> <p>たくましく生きるための健康や体力</p> <p>健やかな体</p> <p>現行学習指導要領においては、これまでの理念を継承し、教育基本法改正等を踏まえ、「生きる力」を育成</p>

学習指導要領改訂の視点

新しい時代に必要となる資質・能力の育成

①「何を知っているか、何ができるか（個別的知識・技能）」

各教科等に関する個別の知識や技能などを、身体的技術や芸術表現のための技能等も含む。

②「知っていること・できることをどう扱うか（思考力・判断力・表現力等）」

主体性・創造性に問題を発見し解決していくために必要な思考力・判断力・表現力等。

③「どのように社会と関わるか（人間性や自己に向けた力等）」

④「どのくらいが標準か（標準化等）」

⑤「多様性を尊重する態度と互いの良さを生かして協働する力、持続可能な社会作に向かう態度、リーダーシップやチームワーク、属性、属性を想いながら」

何ができるようになるか

育成すべき資質・能力を育む観点からの
学習評価の充実

何を学ぶか

どのように学ぶか

育成すべき資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目次等の見直し

◆ グローバル社会において不可欠な国際的・国際化の視点(小論文等)を踏まえ、教科化等や、我が国の伝統的な文化に対する尊重等を踏まえ

◆ 国家・社会の責任を明確化して、また、自ら個人として生きる上に向けた精神修養や修身規範等の形成等を踏まえ、各教科等においてより柔軟な取組みを行うことを含め、教科等の見直しなどを行う。等

アクティブラーニングの視点からの
不断の改善改善

◆ 課題・活用・検査という学習プロセスのなかで、問題発見・解決を重視した深い学びの評価が重要であるから

◆ 学者の立場や外見上の相互作用を通じて、自らの考え方だけではある、社会的な学びの過程が実現できているか

◆ 学生たちが実験・操作等を通じて、自らの学習活動を実現していく力につなげる、主体性が半ばの過程を重視してい

いるから

II. 日本の教育政策の一部の紹介 高大接続について

「高大接続改革」

○「高大接続改革」とは何か。

◆ 大学入試改革も含まれているが、それだけではない。

- ①「高等学校教育」と、
②「大学教育」、
③两者を接続する「大学入学者選抜」を、
連続した1つの軸として、一体的に改革するもの。

○なぜ「高大接続改革」なのか。（なぜ第三者一体なのか）

◆ 「高等学校教育」と「入学者選抜(大学入試)」は一緒に変わらせる必要。

- ・大学入試が変わらないと高校教育が変わらない、
・受験圧力の低下と高校生の学修量の低下、等

◆ 少子化・国際競争の進展の中で、大学教育の質的転換(しっかりと学ぶ大学教育へ)

- ・大学教育を受けるに足る入学者の選抜
・多様な入学者とそれに合わせた教育プログラムの必要性、等

「高大接続改革」の必要性

●国際化・情報化の急速な進展
→ 社会構造も急速に、かつ大きく変革。

●知識基盤社会のなかで、新たな価値を創造していく力を育むことが必要。

●社会で自立的に活動していくため
に必要な「学力の3要素」をバランスよく育むことが必要。

【学力の3要素】

- ① 知識・技能の確実な習得
②(①を基にした)思考力・判断力・表現力
③ 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

学力の3要素を多面的に評価する
大学入学者選抜

高等学校教育・大学教育・大学入学者
選抜の一貫的改革(高大接続改革)

学力の3要素を育成する
高校教育

高校までに培った力を更
に向上・発展させ、社会
に送り出すための大学
教育

高大接続改革の全体像イメージ

高等学校教育改革【「学力の3要素」の実現を目指す】

✓学習指導要領の基本的な見直し

・育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の見直し
・カリキュラム・カリブックスの見直し

✓学習・指導方法の改編

・アクティブラーニングの徹底化の実現
・ゼミの創成・開拓・運営の見直し

✓多様な評価の推進

・学習評価の改編

・多様な学習形態を実現するツールの充実
・授業評議会の実現
・課題提出の実現
・定期評議会の実現
・定期的な評議会の実現
・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

・定期的な評議会の実現

<div data-bbox="34

◆付録 6. 過去のプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
第1回：2002年12月1日～14日	東京都、和歌山県、岡山県、広島県、高知県、大阪府、京都府	97名
第2回：2003年11月26日～12月9日	東京都、熊本県、愛知県、島根県、徳島県、大阪府、京都府、奈良県	100名
第3回：2004年11月18日～12月1日	東京都、宮城県、長崎県、宮崎県、沖縄県、大阪府、京都府、奈良県	99名
第4回：2005年10月18日～31日	東京都、長野県、福井県、和歌山県、宮崎県、大阪府	101名
第5回：2006年10月18日～31日	東京都、千葉県八街市、埼玉県、岐阜県、高知県、山口県柳井市、大阪府、奈良県	135名
第6回：2007年10月16日～29日	東京都、千葉県八街市、岡山県総社市、富山県南砺市、三重県、岐阜県、大阪府、奈良県	135名
第7回：2008年10月14日～27日	東京都、宮城県気仙沼市、福島県、京都府与謝野町、香川県、福岡県北九州市、大阪府、京都府	133名
第8回：2009年10月13日～26日	東京都、岡山県総社市、熊本県植木町、沖縄県那覇市、千葉県成田市、埼玉県さいたま市、大阪府、京都府	142名
第9回：2010年10月12日～25日	東京都、秋田県大仙市、滋賀県近江八幡市、宮城県気仙沼市、長崎県壱岐市、長崎県、大阪府、京都府	130名
第10回：2011年10月12日～23日	東京都、山口県美祢市、熊本県荒尾市、東京都多摩市、岡山県総社市、徳島県、大阪府、京都府	134名
第11回： 第1班：2013年11月13日～24日 第2班：2013年12月1日～10日	第1班： 東京都、大阪府 第2班： 東京都	第1班： 50名 第2班： 49名
第12回：2013年10月20日～28日	東京都、熊本県荒尾市、岡山県総社市、長崎県長崎市、和歌山県、大阪府	59名
第12回：(追加プログラム) 2014年9月21日～29日	東京都	29名
第13回： 第1班：2014年10月19日～27日 第2班：2014年11月16日～24日	第1班： 東京都、東京都多摩市 第2班： 東京都、熊本県荒尾市、長崎県長崎市、福岡県	第1班： 34名 第2班： 63名
第14回：2016年1月18日～24日	東京都、熊本県荒尾市、長崎県長崎市、石川県小松市、福岡県	98名
第15回： 第1班：2016年11月7日～13日 第2班：2016年11月28日～12月4日	第1班： 東京都、高知県 第2班： 東京都、奈良市、京都府	第1班： 20名 第2班： 20名

計 1,628 名

●国際連合大学 2016–2017 年国際教育交流事業●
中国教職員招へいプログラム
実施報告書

2017 年 2 月

編集・発行

国際連合大学 (UNU)

〒150-8925

東京都渋谷区神宮前 5-53-70

電話 (03) 5467-1212

URL <http://jp.unu.edu/>

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒162-8484

東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館

電話 (03) 3269-4498

Email accu-exchange_ml@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by WACO Inc. [130]

©2017 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)